になりたいと思ふのも、功名富貴を得たいと思ふのも、またK自身が一生懸命に學業にいそしむといふことも、實は皆なそれを對象にしてゐて、一に美しい姿とはなやかな色彩とに望みをかけてゐるやうなさうした歡樂が漲るやうにかれの心と體とに集つて來た。

（あの昨夜の若い可愛い女中が此處にゐたら何うだらう？）

こんなことをKは考へた。Kは體中が燃えるやうになつて來るのを感じた。

誰もゐなければ、そんなことは何でもないことだなどとつゞいて思つたKは、樂しいやうな、焦々するやうな、草も木も皆な自分と一つになるやうな、日影も、日に照された躑躅の赤い花も、何も彼も、皆なさうした歡樂の世界に自分と一緒に溶けて來るやうな氣がした。

と、不意に、その心の底から、ある聲が來て呶鳴つた。

（意氣地なしめ！　馬鹿め！）

かうその聲は言つた。Kはびつくりした。一時さうしたイリユウジョンがすつかり消えたやうな思ひがした。

（獨りを愼むといふことは、さういふことを言ふのだ。）

小賢しくも學校の倫理の先生に敎はつた言葉まで思ひ出されて來た。

Kはまた默つて歩いた。

しかし內部から誘ひ起つて來る力は、容易に押へてしまふことは出來なかつた。再び氣がついた時には、さつきの理性の聲はもう何處かに影も姿もかくして了つて、（だつて、しやうがない。）といふ心と、（誰も見てやしない。）といふ念とが、その焦燥と一緒になつて渦を卷いた。

思ひもかけず、林の中から、ガサガサと音がして、大きな鉈を持つた山男が出て來た。

じろりと此方を見た。

Kは自分の腹の中まで、すつかり見られて了つたやうな氣がして、はつとした。すぐ低頭いて了つた。

しかし、その山男はかれの思つたやうなものではなかつた。また、かれを十九歳の青年とも思つてゐなかつた。かれは體が大きかつた。手足などはもう誰にも大人に見えるほど發達してゐた。

山男は、丁寧に、

『お暖かな日だなし。』

と挨拶した。

それに氣を得たやうにして、

『I町まではまだ餘程ありますか？』

かうKは訊いた。

『I町かな、さアな、まだ一里半にやちと遠かんべいかな。』

『難有う。』

かう言つて別れた。暫く行つて振返つて見ると、ガサガサとまた草藪をわけて林の中にその山男の入つて行くのが見えた。

とんだ邪魔が入つたやうな氣がした。その樂しい世界に入るためには、かれはまたある期間を要さなければならないやうな思ひがした。しかし、さうでもなかつた。やがて再び美しい色彩と甘い想像とは漲つて來た。あらゆる美しいもの――本で見たもの、または實際に見たもの、夢に見たもの、さうしたものがすべて自由に、障碍なしに、再びかれの周圍に集つて來た。」

ある場所を求めるためにかれは路傍の林の中に入つて行つた。

三

悲しいやうな、淺猿しいやうな氣がKにはした。しかし、何うすることも出來なかつた。もしこれがもう少し年を取つてゐるか、でなければ更に深くさうした性慾に入つて行つてゐるかしたならば、《何うもしやうがない。これが人間なんだから。》とか、《淺猿しいけれどしやうがない。》とか言ふのであらうけれど、否、更に、もつと年を經て、妻でも持つてゐたり子供でもあつたりするならば、《へゝん、馬鹿な！》かう言つて笑つてすましてゐるわけには行かなかつた。

あとが振返つて見られるやうなわびしい悲しい氣がした。

しかし、さうした感じも、瞬間であつた。Kの心はすぐその坐つた傍の草藪の綠葉、または處々に點綴された赤い小さい躑躅林を透して漲り落ちて來る美しい明るい光線に移つて行つた。《自然はかう美しいのに、人間ばかりは何うしてかう汚ない業をするのだらう。》かうむら〳〵と思つたが、それも長くはつゞかずにぢき消されて行つた。小鳥がすぐ頭の上で、鈴のやうな好い聲を立てゝ鳴いた。

遠くで、木樵の木を伐る音が山のこだまに響いて聞えた。

柔らかな撫でるやうな風が靜かに草藪の萱の葉を搖かした。

かれは暫しぼんやりして、草の葉に縱橫に織り込まれた、何うしてあゝ自然は複雜した色彩を示すであらうと思はれるやうに美しい日の光線をぢつと見詰めた。と、不思議にも、眼の前には、黃い赤い、または紫の小さな輪がいくつともなく無數に出來て、その中に一つ一つ美しい顏やら、白い肌やら、メリンスの帶やらがチラ〳〵とちらついて動いた。

四

林から出て少し來た時、思ひもかけず、Kは、かれから少し先に、七八間先に、かれの今まで歩いて

來た林に添つた草藪の中の路ではなかつたけれど、その人通りのない杉の並木道に、派手な帶に着物をくるりとまくり上げて、赤い中に紫の色の交つた腰卷と白い足袋とを見せて、銀杏返しに結つた若い女がてくてく歩いて行くのを目にした。

かれははツと思つた。

不思議な氣がした。微かに、何處かで何物をか惜むやうな思ひがした。

やがて、此方の歩く氣勢が聞えたといふやうにして、女は振返つてKの方を見た。

Kもちらつと色の白い、年もまださう取つてゐない、少くとも自分より二つか三つ上位の美しい女の顏を見た。

女は立留つて、Kの近く歩いて行くのを待つた。

すぐかう聲をかけた。

『あんた、I町まで行くの？』

『え……』

『なら、一緒に行つて下さらないこと。私、さつきから怖くつて、怖くつて、何うしてこんな路を歩いて來たかと思つて後悔してゐるんですから……。』

『何うかしたんですか？』

普通なら、こんなに素直に、平氣に、女に向つて口のきけないKであつたけれども、その時は、女の態度に引張られるやうにして、思はずかれはかう言つて訊いた。

『何うもしないんですけれども……何處まで行つたつて人つこ一人ゐないんですもの……。さびしくつて、さびしくつて、びく〳〵しながら歩いて來たんですよ。I町まで、何うせ、貴方も行くんでせう。後生ですから、一緒に行つて下さらないこと？』

『えゝ。』

『まア好かつた。これで安心した。』かう言つて女はKの樣子を見るやうにした。十九の一少年だとは思はなかつたらしいけれど、路伴としては決してわるい狼ではないと思つたらしく、『だつて、さつき、あそこを通ると、山小屋があつたでせう。あそこに男が二三人ゐたでせう。何にも言ひはしないですけどもね、もし、何か言はれたら、何うしようと思つて、生きた空はないやうな思ひをして來ましたよ。』

Kは笑つただけで、別に何も言はなかつた。何だかきまりがわるいやうな、またさつき林の中でやつたことが振返られるやうな氣がした。

Kが一人で林の中に入つたと同じやうな心理が、矢張さうして一人で淋しい路を歩いて來た女にも起つて來てゐたのであつた。勿論、男と女の相違があるために、男のやうにプラス式の加算では起つて來ずに、マイナス式の減算であべこべにさうした小さな恐怖となつたのであつた。しかしKは決してそん

なことは考へなかつた。Kは唯默つて歩いた。

『あなたもK町から今朝來たんですか?』

『え。』

『私は今朝早く立つて來たんですけれども、男の足は何うしても早いわねえ。』

『……』

坊ちやんでなしに、あなたと言はれるのがKには變にきこえた。一つか二つしか年が上ではないであらうが、ぐつと世馴れて、さうした男女の世界にも既に十分浸つてゐるやうな女の態度は、ともすると、Kの心を壓すやうにした。

一人かうして若い女がさびしい路を選んだのを辯解するやうに、

『汽車でいつも來るんですけどもね。くるッと廻らなければならないし、時間も、歩いた方が早い位だつて言ひますからね。それで歩いて來て見たんですけども……。人通りのないのはきいて知つてゐましたけれど、こんなぢやないと思つた……。』

矢張、Kはその話相手にはなれなかつた。

しかし、默つて、成るたけ、一緒に歩いてやらうとしてゐるKの胸には、いろいろなことが渦を卷いて起つて來た。さつきの心と體との性慾の甘い壓迫やら、あたりに自分とその女と二人しかゐないといふことやら、何んなことをしてもあたりに誰も見て居るものもなく、さうした禁斷の果實を食つても、一時間か二時間の後に別れて行つて了ひさへすれば、あとに何の痕跡も責任も殘らないといふことやらが、不思議な、今までに經驗したことのない、言はゞ不良少年に近いやうな心を誘つた。かれは赤い腰卷の下から出てゐる白い肌膚をした足や、銀杏返しの髪のところに、すらりとつゞいてゐる艶な襟首や、田舍の女に似合はない手首や指の白く細いなどに眼を注いだ。

一歩一歩小刻みにかれの前に歩いて行く小さな肉體から發散する空氣が、ともすると、かれの疲れた體と心とに甘く心持よく浸み透つて來るやうな氣がした。

しかしKをして、さうした不良少年らしい態度に出でしめなかつたのは、性來臆病であつたからでもあるし、またそれまでに何等さうした經驗のない身であつたからでもあるが、一方さうした自分を客觀して、《そんなことは知らずに、女はいゝ伴侶を得たと思つて歩いてゐるのだ。そのすぐ後に、さうした異圖を抱くわるい狼がついてゐて、いつ飛蒐つて行くかもわからないのをも知らずにゐるのだ。》かう思つて、人間の心と言ふものゝ解らないものであるのを思つたりする餘裕があつたからであつた。かれは唯默つて歩いた。

それとは反對に、女は益々信用をかれに置いたらしく、やがては、更に、思つたよりかれが年少で、默つて歩いてゐるのを、唯、きまりがわるいとばかり解釋したらしく、頻りに、後から續くKを待つやう

にして、いろ〳〵なことを話し懸けた。

『もつと早く、歩いて下すつても好いですよ。私が足が遲いと思つて、遠慮して下さるんでせう。もつと、いくらでも早く歩けるんですから。』

などと言つた。

時には馴れ馴れしく、故郷のことやら行先のことやらを訊ねて、

『さう、T町なの……あそこに、私、一度行つたことがありますよ。賑やかな好い町ね。四辻のところに釣竿なんか賣つてゐる家がありますね。あそこに子供のうちに行つて泊つたことがありますよ。』

『親類なんですか？』

『親類ぢやないけど……。死んだ父親があそこの旦那を知つてゐましてね。T町には大きな城だの、沼だのがありますね。』

『え。』

かと思ふと、女も何か心配でもあるやうに、今まで話しかけてゐた話をぷつつり切つて、默つて、物思はしさうにして、溜息を吐いた。

實はわるい狼であるのに、人の好い驢馬と信用されて、平氣で、相手にされてゐるのがKには辛いやうな氣がした。これがもし此方の心がわかつて、向うも、わるい狼か猫と言ふ風に出て來て、ほんの一

時の戯樂でも何でも、人のゐない處で、思ふまゝのことをしたら、何んなに好いだらうなどゝKは思つた。

Kは體が熱くなつたり、辛く辛くなつたり、またはこの女を護つて伴れて行つてやることを喜ばしく思つたり、一人では淋しい道に兎に角さうした伴侶を得たことを仕合せのやうに輕く考へたりして、向うから話しかけることを唯素直に點頭いてきくばかり、靜かに人氣のない石の凹凸した並木の中の路を歩いて行つた。

時には、その後について歩くのを苦しむやうに、わざと二三間距離を隔てゝKは歩いた。

五

女はまた立留つて、後れ勝なKを待つた。

『もう一里の上歩いたわね。』

『さつきのところから？』

『さうよ。』

『歩いたでせう。……』

『ぢや、もうI町ぢきね。』

『……』

ちらほら農家らしい人家や、菜園らしい畑はそのあたりにあらはれ出して來てゐた。長い杉並木の路は、まだ依然として暗く續いてゐたけれども、それでも何處となく人聲がしたり、鷄犬の聲がしたりして、今までのやうな淋しい、荒涼とした氣分は漸く少くなつて行つた。(もうさうした空想も全く空想となつて了つた。)かう思ふと、Kはさびしいやうな氣がした。

向うから、ぽつかり、鋤を擔いだ農夫が一人出て來た。

女は立留つて訊いた。

『I町の近所に、Y村ッて言ふ村がありますが、そこはまだ遠いでせうか?』

その農夫も同じく立留つて、『こゝもY村だが、Y村の何處だすな、Y村もこれで廣いでな。』

『萩原新田?』

『萩原かな、萩原はすぐそこだ。』後を向いて、並杉木の間から明るく向うに見える新しい古い藁葺屋根に日影のさしてゐるあたりを指して、『あそこが萩原だな。』

『萩原に、益田ッていふ家がありませうか?』

『益田さんかね……』農夫はかう言つて胡散臭さうに、女と、女と一緒に歩いて來てゐるKとを見て、『益田さんなァな、すぐだ。もうちつとんべい行くと、右に庚申さまが立つてゐらァ。そこから、左を見ると、奥のつき當りに見えてゐる新しい屋根が益田さんだァ。』

『難有う。』

かう女は禮を述べて、農夫と別れて此方に來たが、急に、安心と不安とが一緒にやつて來たといふやうに輕い溜息を吐いた。

やがて、Kに、

『お蔭さまで、さびしい思ひをせずにやつて來ました。難有う御座んした。もう、お別れですね。』

かう言つて、また溜息をついて、言はうか言ふまいかと暫しは惑つたといふやうにして、『後生ですがね、もう一つお願ひがあるんですがね?』

『……?』

『あのね、此處まで一緒に來て戴いたのさへお氣の毒でしたのに、こんなことをお願ひしてはすみませんがね。そこに益田ッていふ家があるんですがね。そこにちよつと行つて、弘治さんッていふ息子がゐるか、何うかつて聞いて、ゐたら、伴れ出して來て吳れませんか。』

『……』

『ね、後生ですから。』

Kは種々のことがすつかり飲み込めたやうな氣がした。默つて、好いとも厭だとも言はなかつたけれど、さうかと言つて、振棄てゝ、すたすた向うに行つて了ふわけにも行かなかつた。

『ね、後生、一生のお願ひですから。』

かう女は一方に賴むと共に、『何うせ、私もI町まで行くんですけど、通り路だからちよつと寄つて行つてやらうと思つて……。』などゝ辯解した。

やがてその庚申の石の立つてゐるところに來た女は、

『あ、あの家！……あの屋根に日の當つてゐる家だ。ね、お氣の毒ですけどもね、ちよつとさう言つて下さいな。ね、好いでせう？』

斷ることの出來ないやうなやさしい姿態を女はKに見せた。

『ゐるんですか、屹度……？』

『ゐると思ふの？　屹度ゐると思ふの？　私、ぢかに行つても好いんだけども、家の人に逢ふと、面倒だし、すぐまた行けないから。ね、お願ひですからね。後生ですから。』

『弘治つて言ふんですね。』

『え、弘治よ。』

爲方がないので、Kはその儘、その路を左に入つて、その女の爲に、きまりが惡い思ひをしながら、一歩一歩その日の當つた藁葺の家へと近寄つて行つた。半ば開墾された畠と林檎らしい花の一杯に咲いてゐる果樹園、それに雜つて、新綠の林がキラキラ光つて濃淡の縞を地上に織り出してゐるのが見えた。

ふと其處に、畠に耕してゐる日雇らしい男と何か頻りに話してゐる若い男をKは目にした。段々近づくと、向うもKの入つて行くのに目をつけたらしく、農夫との話をやめて、立つてぢつと此方の近寄つて行くのを待つやうにした。

Kは突如に、

『此處に、弘治ツて言ふ人はゐるでせうか？』

『こうぢ？』

ちよつとわからぬやうにその男は反問したが、

『益田弘治ツて言ふんです。』

かうはつきりKが言ふと、

『益田弘治……それは僕です。』知らない青年にかう呼びかけられると怪しむやうにしてその男は言つた。

『今、ちよつと、路づれの女に賴まれたんですが、ちよつと來ていたゞきたいツて……』これだけ言ふにもKは顏が赤くなり、呼吸がつまるやうな氣がした。

しかも忽ちそれが男にはわかつたらしく、『あ、さうですか、何うも難有う……』早口に、しかもおどおどと、または最初の尊大な口振は何處に行つたかといふやうに、今まで話してゐた農夫などはそのま

ま放つたらかして、急いでKのあとに續いて、此方の並木路の方へと出て來た。

庚申塔の傍に立つてゐた女は、それを見ると、

『まア、貴方。』

男は男で、

『お前かえ、何うしてやつて來たんだえ？　歩いてやつて來たのかえ……。』

急には口もきけないといふやうに、またKがその傍に立つてゐるのなどは眼中に置かないやうに、心と心、體と體とが兩方からひとり手に合つて行くやうに、二人は相對して顏を見合せた。

Kは自分がわるい狼どころか、人の好い驢馬であつたことを思はずにはゐられなかつた。暫く立つて見てゐたが、Kはやがて挨拶して別れようとした。

流石に、女は氣の毒さうに、

『何うも難有う御座いました。お蔭で何んなに安心して來たか知れやしないんですよ、貴方。』半ば男の方に向つて言つて、『本當に、お禮の申上げやうもないんですよ。』急に、帶の間から財布を出して、その中から五十錢銀貨を一枚Kにわたさうとした。

『そんなものいらない。』

かう言つて、Kはそのまゝ驅け出して了つた。

Kは暫しの間足を留めなかつた。かれは不思議な心持がした。禁斷の果實に手を觸れなかつたことを惜しむやうな心もすれば、また一方にはさうした所爲に出なかつたことを自分のために喜ぶやうな氣もした。『何うせ、あゝいふ女なんだ。節操も何もない奴だつたんだ。狼になつてやれば好かつた。』こんな風にも考へられた。かれは一町ほど來て振返つて見たが、二人が並んで、さながら互に抱き合ふやうにして、餘所目も觸らずに、何か頻りに話し合つて居るのが小さくはつきりと手に取るやうに見えた。

Kは羨しいやうな情けないやうな氣がした。人並よりもませて熱い心を抱いてゐる自分が、さうした女とは、まだ容易に近づいて行くことの出來ない年齡であることが悲しく辛く情けなくなつて來た。かれは再び振返つて見ようとはしなかつた。

かれの前には矢張、退屈な、單調な、兩側に草藪や林などのある杉並木の長い路が續いた。午近い日影は麗らかにあたりに照つた。

足

ぽつかり大きな足が二つ並んで私の眼に浮んだ。それは寢てゐる人の足ではなくして死の床に横はつてゐる人の足である。それも若者や中年の人の足でなくて、老人の足である。大きな老人の足である。いかにも活動の一生を送つて來たやうな、死んで迄も人を驚かさずには置かないやうな大きな足――。

『あゝまたIのおぢいさんを思ひ出した。』

かう私が妻に言ふと。

『面白いおぢいさんでしたね……もう亡くなつてから餘程になりますね。』

『さうだね。もう餘程になるね。お前が嫁に來た翌年か、翌々年かに死んだんだから、もう二十五六年になるね。』

『さうなりますかね。喘息か何かで、家に來るにも休み休みやつて來て、それでゐて元氣で、よく冗談などを言つて、私達をからかつたり何かしましたね。フウ、フウ、フウ。』とある時間呼吸をつかずに

は談話が出來ないといふやうな眞似を妻はして見せて、『あのフウ、フウ言つてゐる大きなおぢいさんが今でも目に見えるやうな氣がします。』

『面白いおぢいさんだつたからな……。それにしても不思議なのは、あのおぢいさんの大きな足が、何うかすると、いつでもはつきり思ひ出されて來ることだね。そしてその足を思ひ出すと、何とも言はれない氣がするね。あのおぢいさんの持つたやうな大きな足を持つやうにならなければ駄目だつて言ふ氣がするね。』

『その話は、もう何遍もうかゞひましたね。』

『幾度話しても、決して古くならない、つまらなくならないから不思議だ……。大抵の印象は、何んなに其時感激したことでも、現に自分がその渦卷の中に入つてみて、直接に痛切に受けた印象でも、時を經ると淺くなつたり、平凡になつたり、別に心を動かさなくなつたりするものだが、あの大きな二つ並んだ足だけははつきりと頭に殘つてゐるからね。いかにも活動した昔の人の足つて言ふ氣がするからね。』

『何ういふ話でしたつけね。その話は？』

『なアに、別に、話つて言ふほどの話もありやしないサ。おぢいさんが二三日具合がわるくつて寢てゐるとは聞いてゐたが、つい、此方が忙しいかなんかして、近いのに、見舞にも行かずにゐると、死んだつていふ報知だから、吃驚して出かけて行つたのサ。何でも、社から歸つて來て、それをお前からき

いて、急いで出かけて行つたと覺えてゐるが、くやみなどを言つてその死骸の横はつてゐる室に入つて行くと、いきなりその足が、その大きな足が、深く土ふまずが刻み込まれてゐる、ザラザラするやうな皮膚の色をした、拇指などの思ひ切つて大きい足が、丁度、「俺は此處にゐる。俺は此處に存在してゐる。」といふやうに、眼の前に並んでゐるぢやないか。その時は變な氣がしたね。その足に壓倒されるやうな氣がしたね。悲しいとか、凄じいとか、怖ろしいとかいふ氣分ではなくつて、大きなものを見たといふやうな氣がしたね。死んでまでもさうして自己の存在を人に示してゐるやうな死に對して驚嘆の念を起したね。』

『さうですかね……話だけでは、私にはよくわからない。』

『それはさうだらう。あれを見ないお前にはわからないだらう。見ても亦お前にはさうした氣は起らなかつたかも知れない。俺だけにさうした氣がしたのかも知れない。』

『兎に角、面白いおぢいさんでしたよ。』

『面白い位ぢやない。本當の人間だつていふ氣がするね。いや味なんか少しもなくつて、何んなことでも平氣で言つて笑つてゐるやうな人だつたからな。今の老人にはとてもあんな眞率なおぢいさんを發見することは出來ない。矢張、昔の人だつたんだな。武士の魂と、擊劍とで築き上げたやうな人だつたんだな。』

かう言つた私の眼の前には、そのI翁の大きな顏が、田舍武士のちよつと聞取りにくいスラングが、フウフウ言つて呼吸をついてゐるさまが歷々と浮んで見えた。

『あれで、會津の藩士では、有爲な人傑だつたんだ。南會津の山の中で集めた農兵を帥ひて、裏口から入つて來ようとする官軍を滅茶滅茶に破つた經驗なども持つてゐるんだからな。中々あれでやつた人なんだ。京都などにも、五度も六度も出かけて行つて奔走したり何かしたりしたこともあるんだ。その時分の話を聞くと、面白かつたよ。それに、隨分辛酸を嘗め盡したんだね。何ぞと言ふと、「何ア、戰爭の時のことを思へば、そんなことは何でもない、極樂ぢや、極樂ぢや。」つて言つてゐたがね。さうかと思ふと、あれで、細君に背かれて、三番目の女の子、その女の子は死んだが、それを抱いて乳を貰つて歩いたつて言ふやうな經驗もしてゐるんだからね。』

『そんなことがあつたんですか。あのおぢいさんに？』

初めて聞いたといふやうにして、妻は言つた。

『色戀だつて、散々あれでやつて來たやうな人なんだからね。』

『さうですかねえ。』

『さうぢやなくつちや、あんなに餘裕のあるおぢいさんにはなれやしない。さういへば、お前の來た時分、よくあのおぢいさんはやつて來てひやかしたぢやないか。』

『言葉がよくわからないから、あの時だつてはつきりよくはわかりませんでしたけれど、變でしたよ、あの時分は――。』

『家の近所に、火事があつたのをそのひやかしの材料にして、これは大變だ……。若い夫婦が餘り交情が好すぎるんで、それで、火事でも出したんぢやないかつて心配したなんつて言つて、あの大きな體をゆすぶつて笑つたことがあるぢやないか。』

『さうさう、そんなことがありましたね。』妻も遠い昔を思ひ出すやうにして、『さう言へば、本當に面白いおぢいさんでしたよ。貴方のことを錄彌さん、錄彌さんて言つて、いつもあの入口の格子のところに來て、あのフウ、フウをやつてゐるから、出て見ないでも、あ、あのIのおぢいさんがやつて來たといふことがわかるんですよ。と暫くすると、錄彌さんゐるかなつて言つて入つて來るんですよ。本當に、まだ昨日のやうですけどもね。』

『あれで、あのおぢいさん、大變な旅行家だつたぜ！　一度、いろいろなところを知つてゐるので驚かされたことがあつた。何でも、房州の話だつたが、あんなところを知つてゐるのかしらと思ふやうなところをすつかり知つてゐるんだからね。あの時分では、此方も若く、自分ばかりが旅でもしてゐるやうに、または自分達ばかりが本當の經驗をしてゐるやうに獨り合點をして思つてゐたもんだが、あのおぢいさんなんかだつて、皆な同じことをやつて來たんだね。旅もしたし、戀もしたし、社會にも出て働いたし、戰爭もしたし、まごまごすれば死ななければならないやうな目にも遭つたし、御維新後の苦しい士族の零落も、會津藩だけに他の藩の人よりも一倍多く辛い思ひをして通つて來たし、あらゆる辛酸も歡樂も嘗めて來たんだ。でなくつちや、死んでまで人を壓倒するやうなあの大きな足の印象を人に與へるやうなことなぞは出來やしないからね。』

『さうでせうね。』

『兎に角、豪い、大きい人だつたに相違ない。何しろ、あの年になつてからでも、唯、じつとしてゐると言ふことは出來なかつた人だから……。だから、田舍に行つてゐた時でも、郡長樣の隱居ですましてはゐられないで、その土地の歷史を調べたり、風俗を調べたりして、大きな鄕土誌見たいなものを五册も六册もつくつてゐるし、漢詩はさう旨いつていふ方ぢやなかつたけれども、澤山に澤山につくるし、和歌まで、出來ないなりに詠んだり何かしたんだからね。片時も唯はゐられなかつた人なんだよ。』

『歌や詩はよく作るおぢいさんでしたね。』

『何でも、あの詩は殘つてゐるだらう。十册や十五册はあつたよ、詩が……。長い古詩なんか澤山あつたよ。』

『その詩や歌の話をしに、あなたのところにあの時分よく來たんですね。』

『うん、まアさうだね。詩か歌が出來ると、誰かに見せて樂しまずにはゐられなかつたんだね。それ

で、宅へよくやつて來たんだよ。』

『何うして、また、あなたはあんなおぢいさんが友達なんだらう。と私はまた當座思ひましたよ。』

『好い氣分の人だつたからな。年寄りらしいところなんか少しもなかつたからな。いやに若い者を褒めるぢやなし、さうかと言つて、自分の持つてゐる經驗を見せびらかすぢやなし、年こそ違へ、お互に書生のやうな氣分で話の出來るおぢいさんだつたからね。詩なぞでも、この字はこれよりもこの字の方が妥かではないかなどと言ふと、さうだ、さうだ、その方が好いなんて、すぐ言ふやうな氣分の人だつた。まあ、年を取つたからでもあらうが、あゝした氣分には、人間は容易になれるもんぢやないよ。』

『だから、あの息子の嫁さんなぞにも、好いおぢいさんだつたさうですね。』

『さうさ、もうあらゆることを超越してゐたやうな人だもの。』

『あゝいふおぢいさんが、今でも生きてゐて、始終來たり何かして呉れるんだと樂しみで好いんですけれどもね。』

今は父母にもすべて別れた妻は、かう言つてさびしさうにした。

『好い人は皆な死んで行つて了ふよ。それも仕方がないさ。それよりも、これからは、我々が、後から來る人のために、好い人になる修養をしなければならないよ。あの大きな足を二つ並べたやうには容易になれなくとも、それに近いところまでは行きたいからね。』かう言つて私は考へて、『一生の中に、逢つたり別れたりする人は澤山あるが、深い印象を後まで殘して呉れるやうな人は滅多にはないものだ。さう思ふと、何んな人でも、印象の深かつた人は、自分の一生に寶を與へて呉れたやうなものだ。不思議だからな、ちよつと旅で逢つた人などでも、非常に深い印象を殘すことがあるからね。』

『本當ですね。』

私はまたぢつと深く考へ込んだ。それはこれから春にならうとする大ぶ暖かい夜のことだつた。私は再びなつかしむやうにしてその大きな二つの足を眼の前に浮べた。私は不思議な氣がした。かうして長い一生の間、をりをり浮び上るやうにやつて來る足は、實際I翁の魂ではないか。埋められた墓の中から蘇つて來る魂ではないか。I翁は未だにその大きな存在を要求してゐるのではないか。私はぢつと空間を見詰めた。その大きな足はもう一度はつきりと私の眼に映つて見えたが、次第に薄く、遠く、果てはその元の位置へと深く沈んで消えて行くやうに見えた。

『安らかに落附いて眠り給へ！』かう思つて私は立つて書齋の方へ來た。

Kの死因

一

友人のKが死んだのは、もう十二三年も前のことである。その時、その死が餘りに突然であつたのと、病死にしてはちよつと怪しいと思はれるやうなことがあつたので、内部には何かかくれた意味がありはしないかと親しいもの丶二三は疑つたものもないでもなかつた。しかしKといふ男が元來自殺などをしやうとする方の質ではなかつたし、家庭は圓滿だつたし、生活の方面は、それはさう有福ではなかつたけれども、何方かと言へば金の入る方であつたから、そんなことをするやうな空氣や動機は何處にも見出すことが出來なかつた。『Kが死んだつて？　何うしたんだ。一體……。昨日、僕は逢つたんだよ。別にこれと言つて變つたところはなかつたよ。』かう言つてある友達は私の顔を見た。

『腦だとさ……急に、ひつくりかへつたんだとさ。』

かうは私も言つたが、別にさう平生深くは交際してゐなかつたので、葬式にはそれでも郊外の墓地までついて行くには行つたが、深く立入つて一家の事情を聞くやうなことはしなかつた。Kと親しくしてゐた友達の中には、其後いろいろなことを話してきかせたものもあり、その死因が怪しいなどとも言つたものもあり、あの未亡人の美しい顔を見ただけでもわかるぢやないかと言つたやうなものもあつたが、しかも私は別にそれを氣には留めなかつた。私はまだ若かつた。さうしたことに對して何等の理解も疑惑をも持つやうな資格がなかつた。私は却つて唯一人の遺兒を抱いて泣き崩れてゐた未亡人の涙や、さびしく靜かに棺の中に横はつた友達の遺骸にのみ心を惹かれた。美しい珠のやうな『詩集』一卷を世に公けにして、そして忽ちにこの世から去つて、郊外の墓地の春は桃や椿が咲き、青草が萠える一隅にさびしく墓となつたかれを思つた。

二

しかしKは不思議にも長い間私の頭の中に生きて動いた。あの莞爾した靜かな顔の表情、何處にか明るい中に暗い影のあるやうな氣分、他人がはしやぐ時にも大抵は默つて深く物を思つてゐるやうな態度、さうしたものが何ぞといふと私の眼の前を掠めて通つた。そして、『や、君、久し振りだつたね。』かう言つて人なつかしさうに近寄つて來るかれが見えた。

つゞいてかれに初めて逢つた芝の公園に近い小さな家などが見えた。Kの名は私はその前にも知つて

ゐたが、逢つたのはその時が初めてで、その近くに住んでゐたNといふ矢張筆を持つ友達が、『Kがゐるよ。このすぐ向うに……行つて見ようか一つ……。先生、綺麗な細君が出來たぜ。見に行かうぢやないか。』かう言ふので、ふと行つて見る氣になつて、Nと二人で訪問した。その時、あの若い美しい戀女房であつつた細君が上り端の障子を細目にあけて、きまりがわるさうにして私達を迎へた。私は羨しかつた。生活は貧しいかも知れなかつたけれども、兎に角人生の最初の荒海に乘り出すに當つて、さうした美しいやさしい同伴者を得たことを羨まずにはゐられなかつた。細君は私達のために、茶を勸めたり菓子を出したり、飯時分だつたので、鮨などを取つて御馳走をして呉れた。

歸りにNは言つた。

『でも、あの細君と一緒になるには、Kは大騒ぎをやつたんだぜ。』

『何う?』

『競爭者があつてね。』

『でも、細君の方でも、Kに惚れてはゐるんだらう。』

『それはさうかも知れないがね。そのために、その競爭者は失戀しちやつて、何でも病氣になつて、』

『何だえ?　その競爭者は?』

『何でも、Tの學生ださうだが、幼馴染か何かださうだ。親達も許した仲なんださうだ。處が、Kがわきから行つて、忽ちそれを奪つて來ちやつたつて譯なんださうだ。』

『さうかね。』

『貞操なんかも、だから、あやしいもんだつて言ふことだぜ。』

こんなことをNは言つた。しかし、私に取つては、何は置いても、さうした美しい若い妻を持つたKが羨ましかつた。いろいろなことを世間で噂をするのは、半分は岡燒だなどゝ私は思つた。

Nは言葉をついで、

『君はさうは思はないかえ?』

『何う?』

『樣子をちよつと見てゐても、わかるぢやないか。あの眼がいろいろなことを話すぢやないか。あの皮膚がいやに色つぽいぢやないか。あの態度が肉感的ぢやないか。』

『さうさな。さう言へばいくらかさういふところもあるな。』

三

ある時は、Kは不思議な表情をして、不思議な人物として私に見えた。其時はKはいつもの沈默のか

れではなかつた。顏には一種緊張した色が上り、いくらか昂奮したやうな狀態で、めづらしく聲を高くして頻りに話した。何でもそれは私達の仲間の大勢ゐる席上であつた。

『そんな馬鹿なことはない。それは空想だ。女はとても男にはわからない「何物」をか持つてゐる。その「何物」かで男を自由にしてゐる。女と同棲すれば、男は何うしてもその奴隷にならなければ、その愛をつないで行くことは出來ない。女はいやになればいつでもその後髪を男に見せる。そしてその後髪を見せた時には、屹度その前髪で別の男をつかんでゐる。……女といふものはさういふもんだ。貞操といふ字は、男がその必要上、女を都合よく縛らうとした言葉で、そんなもので女は縛られてゐるものではない。女には虛榮はあるが、貞操はない。だから、僕は言ふんだ。一番、女を縛るには、虛榮の二字が好い。虛榮でならば、いくらか女を縛つて置くことが出來る。』

『ぢや、戀愛虛無論者だね。』

かう誰かゞ言つた。確か理想派のHだつたと思ふ。

『戀愛虛無論者？　さうかも知れない。しかし、君等の言ふ虛無とはちがふよ。戀愛を蔑視したり、無視したりするのとは違ふよ。女性崇拜でもないよ。また女性反抗でもないよ。』

Kは猶ほそれについて、かなりに高い聲をして話した。沈默勝のかれにはめづらしいことでもあり、且つその言ふことが非常に熱心でもあつたので、平生議論好きな、何んな場合にもそれ相應の異論を持

ち出さないことのないPまでが、後には不思議さうにしてKの顏を見た。

たしか、その歸りであつたと思ふが、それともまたその時とは別であつたか、それは今ははつきり覺えてゐないが、何しろ、私はKと二人で雜司ヶ谷の森から此方へ來るところの路を歩いてゐた。

Kは默つて歩いた。

『こつちへ行つちや、遠くなるんぢやないか？』

『なアに、少し……』

かう言つて、Kは私に並んで歩いて來た。私はMの停車場へ行く筈なので、Kが深切にそこまで送つて來て呉れるのかと思つて、

『もう、好いよ、歸りが遠くなるよ。』

『いや！』

もうあたりは暗くなつてゐた。夕日の餘照はそれでもまだ遠い地平線を赤く見せてゐたけれども、家家には灯がついて、畠の上には淡く白い靄が靡いてゐた。

『少し休んで行かなくつちや……。』

かう言つて、かれは急に路傍に蹲踞んで、深い溜息をついた。そして頭を抱へるやうにした。」

暫く經つても、頭を上げない。

『何うかしたのかえ？』

『あゝ苦しい、あゝ辛い！』

『何うしたんだ？』

驚いて私は傍に寄つた。

『なに、何でもないよ。』立上つて、『しかし、君、世の中には辛いことがあるねえ。』

『何う？』

『君なんか、純だから好いよ。かういふ辛いことがあるのも知らないから好いよ。しかし人間だから、君だつて、一度はかういふ辛いことに出會すだらう。』

『何う辛いんだえ？』

『言つたつて、他人にはわからんよ。君が出會して見なくつちや。』と思ひ返したといふ風で、『でも、』どんなに辛くつても、人間は生きて行くから不思議だ。……僕なんか、すつかり泥濘にまみれて了つた。」詩の此頃出來なくなつたのもそのためだよ。もうあの前の詩集のやうな詩は考へたくつても、考へられなくなつちやつた！』

かう言つたが、急に、『ぢや、失敬、僕は此處にちよつと用があるんだから。』

かう言つて、私の何も言はない中に、呆氣に取られてゐる中に、右に連つた人家の中の細い巷路の闇

の中に身を躱して了つた。

この時のことは、かれの死んだ時にも、それから後にも思ひ出さなかつたが、また、思ひ出したにしても、さういふことがあつたといふ以上に何等の反響をも起さなかつたが、不思議にも、それが此頃頻りに思ひ出されて來た。『言つたつて、他人にはわからないよ。君が自分で出會して見なければ――』その言葉がまたしても私の身にからみ附いて來た。

其處には戀の惱み、女の虛僞に對する惱み、疑惑に對する惱みはなかつたであらうか。そこには、かれの若い妻の他の男が住んでゐはしなかつたか。そしてそこには妻はこつそり媾曳に來てゐはしなかつたか。またはそれを大目に見て置かなければ女を所有してゐることが出來なくなる恐れはありはしなかつたか。そしてまた、その蟲も殺さないやうなやさしい顏をした細君の體と皮膚には、さうした欺きの血が流れてゐはしなかつたか。かれがその日平生の沈默の態度を維持することが出來なかつたのは、さうした苦惱がその內部にあつたためではなかつたか。そこに來て、自分の妻の秘密をさがし出さうとしてゐたのではないか。

私はおほろげになつたその事實をじつと見詰めた。

そこから心の一路をたどつて行くと、私は其處にKの死因――本當の死因をさがす事が出來るやうな氣がした。

四

不思議な心の現象ではないか。かう思ふと、墓の中から、Kが出て來て、その本當の死因――世間も法律も親友も何も知らずに、そのまゝ墓に埋められて了つた死因を捜すことを私に勸めた。

『さうに相違ない。さうに相違ない。』

かう思ふと、私の眼の前には、Kと若い妻との關係、Kがその若い妻を幼馴染から奪つて來た關係、若い男女が性慾に夢中になつて行つた形、精神がすつかり肉體に壓されて了つた形、またはさうした熱中から女の方が段々さめて行つた形などが際限なく思ひ出されて來た。

Kの死んだ時分には、私にはまださうした境がわからなかつたことが一方に想像されると共に、私の心が、經驗が積んで行くにつれて、次第にいろいろなことがわかつて來たことを想像した。Kは次第に私の心の中に生きて來た。

ふと浮び出して來たのは、色の白い、眉の濃い、背のさう高くないSといふ男であつた。その男はよくKの家に來てゐた。矢張、詩をつくる仲間で、殊に、女性と戀愛とを歌ふのを得意にしてゐて、女と共に地獄の劫火の中でも翔つて歩くといふやうな熱い情緒をよく長い詩に歌つた。その男がふと浮んで來た。と、Kとかれとの交情の形がぼんやりしたさまではあるけれども、さう思つただけで、ある暗示

を與へるやうに私の眼の前を掠めた。『さうだ……さうだ。それに相違ない。』かう私は確實にあるものをつかんだやうにして獨り叫んだ。

KがSに對する態度やら表情やらが續いてはつきりと私の心に蘇つて來た。Sに對するKのあの眼、またSのKに對するあの眼と言葉、その中には何があつたか。火と水とがなかつたか。さうした苦惱を秘密にするために絶交も出來ずにゐた形が奥深く藏されてはゐなかつたか。互に弱點を握り合つて、左にも右にも行くことの出來なかつた苦惱がなかつたか。

『Kが死んだ時、先生、來てゐたかしら?』

かう私は思ひめぐらして見た。

其時はSはたしかに來てゐた。通夜もしてゐた。いつものやうに平氣で何か話してゐた。長い濃い鬚を頻りに撫でゝゐた。あの時、私に今の體感が出來てゐたならば、またその體感から生れた理解を持つてゐたならば、それこそすぐれた觀察が出來たであらうが、また出來たに相違ないが、惜しいことには、其時は私は普通の平行線から一歩も上に出ることは出來なかつた。私は穩かな空氣の奥に人知れずかくされてある秘密を看破することが出來なかつた。

『さうして考へて見ると、あの一人の男の兒も果してKのであるか、Sのであるかわからない。Kはその苦惱をも墓に抱いて行つたかも知れない。』

私は戰慄した。

また私は私の無邪氣とぼんやりした形とを憫れまずにゐられなかつた。私はある日は、Mの停車場で下りて、そのKが『苦しい』と言つて蹲踞んだところへとわざわざ行つて見る氣になつた。それほど今になつてKの苦惱が私に傳つて來た。

それは晴れた初夏の日であつた。その時分から比べると、東京の郊外はすつかりひらけて、Mの停車場も、もうその時分のやうに小さくなく、前には運送店や、飲食店などが並んで、郊外に出かけて行く若い家族の人達が歩いて行つたりしてゐた。車や人がぞろぞろ通つた。

畠であつたところは、もうすつかり人家になつてゐた。そして細い路が縱横にその人家の間を縫つた。

私は容易にそのKの蹲踞んだところを見出すことが出來なかつた。私は彼方に行きまた此方に來た。しかし暫くして、私は大抵こゝあたりと覺しきところに來て立留つた。

『失敬！』と言つてKが急いで入つて行つた路らしいところには、新しい二階屋が出來て、その門には齒科醫の大きな看板がかゝつてゐた。その向うには、楓の若い綠の中に交つて、紅い薔薇が一つ咲いてゐるのが垣越しに見えた。

路の奥からは、勤人の細君らしい女が出て來た。

私は不思議な氣がして、しばし其處に立つてゐた。確かに、その時、Kはその妻のSと嬉戯するのを

發見するために此路を入つて行つたに相違なかつた。果してそこにかれの妻はゐたであらうか。またSはゐたであらうか。ちやんと現場を見つけても、愛した妻と別れることがいやさに、それをじつと餘所から見てゐはしなかつたであらうか。こんなことを思ひながら、私はその小路の奥深く入つて行つて見た。

少し行くと、芝生の美しい廣場があつて、そんなことがあらうとは夢にも知らない青年達が頻りにボウルを投げてゐた。

私はかれの墓が此處からさう大して遠くないのを知つてゐた。で、ふと行つて見る氣になつて、森を横ぎり、それから田舍路の日影にきらきらするところを通り、川にかけた橋をわたり、坂を上つてそしてその廣い墓地に行つた。

私は會葬した時やつて來たきりで、つひぞ一度も其後は詣でたことはないので、ちよつと墓がわからなくつて困つた。似たやうな路がそこにも此處にもあつた。此路に相違ないと思つて入つて行つて見ても、それはさうではなかつた。

しかし遂に私はKの墓を發見した。四目垣はもう舊く、其處に栽ゑた楓は繁つて、夏の日が美しくそれに照つた。ふと見ると、新しく詣でたものがあつたと見えて、樒の新しいのが墓前に一杯にさしてあつた。

誰でたものは誰であらうか。あの細君ではなかつたか。さうした苦惱を嘗めさせた男の墓前にひそかに花を供へる女の悲哀、その悲哀はあの細君にも必ず一生附纏はつてゐるに相違ないのである。私は心の世界の不可思議を深く感ぜずにはゐられなかつた。私は長い間そこにゐてそして出て來た。

五

時にはしかし飜つて考へた。こんなことを考へて見たところで爲方がない。そのKの死因を今になつて調べて見たところで、それが何うにもなる譯ではない。もし果して自分の想像通りに、Sと細君とKとこの三つの關係が、あの突然のKの死をひき起したとすれば、細君とSとは、既に人知れずに十分にその苦惱を嘗めてゐる筈である。自然の報酬を得てゐる筈である。そのKの死があつたために長い間結んで解けなかつたSと細君との交情も破壞されて行つてゐる筈である。とても、Kの生きてゐた時のやうに、二つの心は張り詰めてゐることは出來ないにきまつてゐる。

かう思つて、私は何遍となく、そのKの死因から離れて了はうと思つた。そんなことは世間に澤山にあることだと思つて、忘れて了はうとした。しかし、またしても、そのKの死因は私の體の中に頭を擡げて來た。何のことはない。讀み始めた怪奇な小說を終まで讀まずにはゐられないやうに、またはそれが自分のある意義ある爲事でもあるかのやうに——。

これと言ふのも、その好奇の種子が私の心にも十分に育てられてあつたからであらう。一々自分の身に思ひ當つて來るやうな追憶が多かつた爲めであらう。私はまたしても、Kの死因に引張られて行つた。

それに表面の穩かな世間に、さうした深い暗い事實と心とがあるのが私にいろいろな想像を誘つた。私はもう世の中といふことは男と女の中といふことだと信ずるやうな年齡に達してゐた。何處に行つても、そればかりである。世間の表面から一歩入ると、皆なそれである。靜かな落附いた顏をしてゐる男にも、またはやさしい蟲も殺さないやうな表情をしてゐる女にも、一歩入ると、その暗い深い心の悲喜劇が藏されてあるのである。從つて人間は、皆な世間を、親兄弟を、友人をあざむいて暮してゐると言つても好いのである。

私はひとり手に溜息の出て來るのを覺えた。

そしてこの裏面は、表面にあらはれてゐないがために、いかに細かい觀察と洞察とを以てしても、表面のやうにはつきりと明白に具體的に知ることが出來ない。そしてその知ることが出來ないといふことが、祕密が、人間の本性の好奇心をそゝるといふやうな形がある。從つて裏面の歡樂と悲哀とにまで到達しなければ、人間は本當の壁に打突かつたといふやうな氣がしない。淺猿しいことである。しかし何うも爲方がない。

Kの遺兒がKのであるか、それともSのであるかといふ疑問は、かなりに强く私の胸に繰返して考へ

られた。そしてそれを知つてゐるものは、Sでもなく、Kでもくく、唯それを生んだ女性であるといふことを考へた時には、その女性が、即ちKの細君が、何ういふ氣持でその秘密の鍵を死にまでその胸に抱いて行くであらうと思つて一種不思議な心持がした。何故なら、それはとても男性にはわからぬことであるからである。理解することが出來ない境であるからである。

細君は果してそれを辛いと思つてゐるだらうか。自分の子の本當の父親といふことを一生その愛する子にかくして置くのについて、何の懊惱をも感じないであらうか。またその懊惱を感ずるにしてもそれは男の秘密を抱いた心の種類の懊惱であるであらうか。男性は懺悔また自白をよくやる。その苦惱を末の末まで持つてゐられないやうなところがある。ところが、女にはそれがない。あつても自發的に懺悔するといふことは先づ少ない。かう思つて來ると、女はそれを抱いて生きてゐられるだけ強いとも言はれるし、又、それほど強く感じないからさうして抱いて持つてゐられるのだとも言へる。世間に知れてその罰を公然と受けて、あとを生れ返らうとするよりは、矢張つゝめるものはつゝんだまゝ持つてゐる方が女には好いらしい。その秘密なところは、私にある心の暗さを思はせた。ストリンドベルヒの女性觀など思ひ出されて來た。

そして私はその秘密が、欺騙が、總ての女に、私の妻にも、私の愛した女にも、または肉身を分けた私の娘にも、同じくあるのだといふことを考へて、一層暗い心の影の身に迫つて來るのを覺えた。

Kもまたかうしたことを痛感したのではないか。戀の苦惱以上に、その異性の秘密に虐げられたのではないか。そして突如として自から自分を殺したのではないか。『K』はその前々日までは平生に變るところはなかつたといふ。莞爾してゐたといふ。笑つて話をしてゐたといふ。かれは尠くとも表面と裏面との間隔をその時深く考へたに相違ないのであつた。

しかし、それをすつかりひつくりかへして、自殺でなしに、他殺として考へて見ることも出來る。ゾラの書いた"Thérèse Raquin"のやうに……。さういふ罪惡もあり得ないとは言へない。また、さう考へて見ると、一層その想像が怪奇になつて面白くロマンチックになつて來る。いよいよ探偵小說でもよんでゐるやうな氣がする。あの若いやさしい女が、その持つた男のために夫に毒をひそかにすゝめる。そして、その毒をかの女にわたした男はSでなくて、藥劑師か何かで、檢死が來ても知れずにすませるやうな術を知つてゐて、そして世間と、法律を巧みにくゞつて來たとする。即ち"Thérèse Raquin"そのままの苦惱を二人は受ける……。こゝまで考へて來て、私は餘りに深く想像に耽りすぎることを思つて引返した。

六

その後暫くしてから私はHといふ仲間に逢つた。

この男も私やSと同じく、Kの家によく訪問して行つた一人であつた。しかし、矢張、私位の交際で、さう深くKの家庭まで入つて知つてはゐなかつたけれど……。

二人きりになつた時、近頃さういふ風にKのことが考へられて爲方がないといふ話をすると、『それは不思議だ……。僕も二三年前ちよつとさういふことを考へて、先生の墓に行つて見たことがあつた。』

かうその男は言つて、凝と私の顔を見て、『何うも不思議だ……。私はその時分二月三月考へましたよ。矢張、精神的に氣分が立つてゐる時でしたがね。さうですか、君も墓へ行つたんですか。何だか因緣話見たいで氣味がわるいな。』

『そして、あの細君は何うしたね？』

『私も、その時、さう思つて、その想像を裏附けるには、現在の細君の生活狀態を知るのが一番好いと思つて、あちこちきいて見たんですよ。』

『何うしてます？』

『ところがわからないんです。Kが死んだ後、暫くはその里の近くに住んでゐたことは知つてゐますが、私がさがした頃には、そこにもゐず、その里さへ何處へ行つたかわからなくなつて了つてゐました。何でも其頃は東京にもゐなかつたらしいですよ。私達にはわからないけれど、何でもあのKの前の戀人であつた、つまりKがそこから奪つて來た幼馴染の男が、Kの死んだ二三年後位まで肺病でゐながら

生きてゐたといふことだが、そつちの方にも、大分いろいろなことがあつたらしいね。』

『さうかね。』

私は深く考へずには居られなかつた。すぐ言葉をついで、

『Sは何うしたね。』

『相變らず不過ですよ。』

『矢張、きまつた細君もまだ持たないかね？』

『あの男は、一生あれで通すんでせう。その方が便利ですからな。』

かう言つてその男は笑つた。

『あのSが、あのKの死因に大きな關係を持つてゐやしないかと、僕は此頃疑ひ出してゐるんだが、君は何う思ふね？』

『あつたかも知れないね。』

『Sがその後、Kの細君の處に出入したやうな形跡はなかつたかしら？』

『あつたかも知れないが、何しろ、僕はあまり近しくしてゐなかつたし、その後は細君の行方もわからなくなつたといふ形だから、詳しくは知らんが、或はSは暫くの間入り込んでゐたかも知れないよ。そんなことや何かで、細君、身をかくしたのかも知れないから。』

『それはさうだね……。今ぢや、Sには別に女があるんだね。』

『それはあるさ……。あいつはいつでも一人や二人女を持つてゐないことのないやうな男だから。』

私は暫く默つた。

『逢ふことがあるかえ？　Sに？』

『つい、此間も逢つた。』

『もう、あの色男も、隨分年を取つたらうね。』

『それでもまだ若いですよ、五つや六つは何うしても若く見える。』

『何んな調子だえ？』

『いつも同じだよ。』

私は私などの持つた戀愛の世界とは丸で別な世界を持つたSやKの細君や、または多くの世間の男女達のことを思つた。さうした人達は、多くは祕密の世界に住んでゐる。薄青いヱイルで包んだ祕密の中から出て來て、そしてまたその祕密の中に入つて行く。永久に祕密から祕密へとそのやつたことを巧みに埋めて行くことがかれ等の爲事である。そしてその祕密の重荷を負つてゐることの辛いことは思はない。

やがて再び私は訊いた。

『Kの細君は、それぢや、今でも東京にゐないのかね？』

『いや、此間Gが話してゐたが、何でもゐるにはゐるらしいよ。日本橋近所の電車の中で、ちよつと見かけたといふことだよ。勿論、口をきいた譯ぢやないさうだけれど、確かにKの細君に相違なかつたと言つてゐたよ。ゐるにはゐるらしいね。』

『さうかな……兎に角、不思議に、Kの死因が氣にかゝつて爲方がないんだ……。Kが墓の中から何等かの要求を我々に向つてしてゐるやうな氣がして爲方がないんだ……。あの當時、書いて置いたものとか何とかなかつたものかな。』

『さア？』

と言つたが、『さア、あんまり神經過敏にはならない方が好いよ。それよりも、旅にでも出かけ給へな。』

『それも、さうだがね。もう少し深く研究して見るのも、我々の爲事の一つには相違ないのだからね。』かう言つて、私は考へて、『しかし、不思議だよ。十二年も經つてから、さうしたことが僕の心の中に生き返つて來るといふことは――。』

『いや、僕は二三年前、大分それで考へさせられた……。肉體は滅びても、精神はいつでも我々と一緒にゐるなどといふことを考へさせられたよ。その時にも、僕も君のやうに、何か書いたものでもないかしらんと思つて、あちこちさがしたけれど、誰も持つてゐなかつた。……僕の考では、書いたものが屹

度あつたに相違ないが、細君が皆な何うかしちやつたんですね。燒いて了ふか埋めて了ふかしちやつたんですね。持つてゐるにしても、一生背負揚か何かの中に入れて、人知れず持つてゐるといふ譯ですね。』

こんな話をしながら、私達は長い都會の路を歩いた。

七

誰もゐない深夜の火鉢の火の中に細君がその祕密の手紙や何かを放り込んでゐるさまがはつきりと私の眼に映つて見えた。と思ふと、今度は人知れず、裏の林の中に小さな鋤を持つて行つて、土を掘つて、周圍に誰もゐないのを見廻して、袂から一束の文がらを出して、それを埋めてゐるさまが、現に私がそれを物蔭にかくれてゐて、一々見てゐるやうにはつきりと想像された。Kの死因に對する私の暗中摸索は愈々興味を深めて行つた。

ある夜は、その埋めた林の中に行つて、自分でその文がらを掘り當てゝ、寶でも得たやうに喜んでゐる夢から覺めた。そして夢であつたと言ふことに氣が附いた時には、非常に私は落膽した。

讀んでゐる小說の中などにも、私はKとKの細君とSとをよく發見した。そしてその發見の度毎にその暗中摸索が次第に明るくなつて來るのを感じた。否、そればかりではなかつた。私の周圍に動いてゐる女、または男、または家庭、さういふものゝ中にも、Kの死因乃至その死因を釀成して來る細かい種子

が無限に芽を持つて發生しようとしてゐるのを感じた。そしてその力は非常に强く且つ熾んであつた。何處にも其處にも、種子の發芽しかけてゐるのを私は感じた。唯、幸ひなことにはその種子の發芽をさまたげてゐるある力、でなければ、その種子が芽を發するまでに力を得て來る以前に、卽いたものが離れ、離れたものが卽いて了ふために、多くは形を成すに至らずして雲散霧消して了つて行つてゐるのを私はまざ〳〵と眼の前に見た。私はいよ〳〵不思議な氣がした。

『此頃、何うかしてゐますね、貴方は――。』

かうある時妻は言つた。

『何故？』

『だつて、變ですよ。いやに考へ込んでゐるぢやありませんか。』

『うん、ちよつと研究してゐることがあるからね。』

『何うも變ですよ。餘り深く考へない方が好ゝ御座んすよ。』

『うむ。』

かう言つたけれど、私は容易にその不思議の研究をやめようとはしなかつた。ある日は急に思ひ立つて、私がKについて知つてゐる土地、住居、または一緒に歩いたところや、レストランや、さういふものをもう一度訪ねて見る氣になつて出かけた。

一番先きにKと初めて知つた芝公園の家のところに行つて見た。しかし、そこにはもうその小さな家の代りに、大きな石の門のある邸が建てられてあつて、その時分の面影はあたりの樹木にすら發見することが出來なくなつてゐた。よくかれとビイルなどを飲んだ公園の小料理屋は依然として元のまゝであつたけれども、その周圍はひらけて、外にもさうしたレストランが澤山に出來て、夏の乾いた路がいやに白ちやけて見えて私の心を悲しくした。Kの詩集にある短かい公園の詩のやうな感じは、もう何處にも發見することは出來なかつた。

Kが三度目位に住んだ麴町の土手に添つた小さな家屋は、それでも依然として元のまゝであつた。其時分、その前に、外國人夫妻が住んでゐて、よくピアノを夕暮に鳴らした。と、そのメロディが何とも言はれず悲しく淋しいと言つて、かれは延びた詩人らしい髪を右の手に擧げるやうにしたが、そこから出て、靜かに土手の方へぶらりぶらり歩いて行くKの姿がはつきりと私の眼に映つて見えた。その時分から、既にかれは戀に惱みつゝあつたに相違なかつた。如何ともすべからざる苦艱に悶えつゝあつたのであつた。美しい細君の顏、細い華奢な指、男の心を一刻も引かずにゐられないやうな眼、さうしたものを持つたKは、第三者にだけ羨まれて、內部は死にまで到達する恐ろしい種子の芽の發して來るのに苦しんでゐたのであつた。私は昔のまゝの低い軒に、しのぶや風鈴などが下つて、貧しい家族が住んでゐるらしいのをやゝ暫らく眺めて、それから、曾てKと歩いたと同じやうにして、土手の方へ行つて見

た。午後の日は明るく濠を照した。

Kの死んだ郊外の家も、まだ依然として殘つてゐた。勿論、その時分は周圍は廣い草場であつたが、その草場はすつかり家屋になつて了つてはゐたが、それでも、ぢきその所在を發見することが出來た。私の眼には、Kの死んだ室、棺、大勢集つた友人達、悲哀に暮れた細君の顏などが見えた。

しかし、この一日の探訪も、私に何の材料をも與へて呉れなかつた。日が暮れてから、勞れて、餓ゑて、そして私は家の方へと戻つて來た。

八

ある日は、Sが出席するといふある會に私はわざ〳〵出かけて行つた。

それは私達の仲間や若い畫家などの多く集るところであつたが、私は度々その知らせの端書を貰ひながら、つひに出かけて行つて見たことがなかつた。その日は、その會は郊外のある小さな料理店で開かれた。

私の行つた時には、Sはまだやつて來てゐなかつた。しかも、私の出席をめづらしがつて、仲間の人達は、何の彼のと言つて、私の周圍に集つて來た。文壇に新しい機運が動いて來てゐる話などが大分はずんで、Nの大きな笑聲やOの眞面目くさつた物語などが其處此處で始まる時分、セルの袴をつけて、ち

よつとした單衣を着たSがステツキを振りながら入つて來るのを私は一番先きに目につけた。

『や！』

『遲いな、いつも早いのに、何うしたのかと思つた。』

などゝ言ふ聲がきこえた。

Sの眼は、逸早く、そこにやつて來た時から、私の來てゐるのをちやんと見て居りながら、わざと私とは離れたところに座を取つて、相變らず元氣な調子で、歌人のFや小說家のRを相手に、頻りに何か面白さうに話し始めた。

私は流石に年を取つたかれを見た。まだ、髮は艶々と濃く撫でられてゐるけれども、顏や肌の皮膚に何處となく影が出來て、色男も年を取つたなと思はせずには置かなかつた。しかし、調子は元氣で、笑顏や話し振りは、多く以前と變らなかつた。私はをりをり其方の方を見た。

私は正面からよりも却つて側面からそれを觀察するのを便利とした。Kの死因をSと細君とに歸して考へた私の眼は、普通と違つて、鋭利に且つ敏捷に、その外面の皮膚よりは一歩奥へ入つて行くことが出來るやうな氣がして、好奇心が強く私の心に張り詰めた。書いたものにもまたはあらゆる材料にも、その事は湮滅して殘つてゐないけれども、また久しく年を經て了つてゐるけれども、尠くともその當事者であつたかれの體には、血には、まだそれがはつきり殘つてゐなければならないと私は思つた。

私はまたしても、ぢつとSの笑つた顏に見入つた。

しかし、お互に知り合つた同士である私とSとは、いつまでもさうした狀態をつゞけて行くことは出來なかつた。膳に向ふ時か何かに、Sは私の近くにゐたのを機會に、

『ヤア。』

と言つて、初めて氣がついたやうに聲をかけて、『君も來てたんですか。ちつとも知らなかつた。Y君が來てゐようとは思はないからね。めづらしいね。何うした風の吹き廻しかといふ譯だね。』

こんなことを言つて笑つた。

私はちよつと挨拶したばかりで、別に何も言はずにゐると、

『本當になつかしいね、もう、何年逢はないか知れないね。』

『家にばかりひつこんでゐるからね。』

かう私は言つたが、研究する氣で、『いつも若いね。』

『いやもう、年を取つちやつてね。』

『でも、まだ一人や二人は始終伴れてゐるツて言ふぢやないか。』

『いや——』

別に大した反應もなかつた。

私は單刀直入的に、

『それにしても、Kの細君は何うしたね。君なら知つてるだらう？』

かう言つて、私はぢつとSの顏に深く見入つた。

Sは、『君なら』がちよつと氣がゝりになつたといふ風で、『僕だつて、よくは知らんがね……』言ひかけて、私の顏を見て、『何うして？　何か必要でもあるのかえ？』

『別に、必要ッていふこともないけども、どうしたかと思つて。』

『東京にゐるにはゐるね、屹度。』

『ゐるかえ？』

『ゐるな、屹度、……誰れかゞ逢つたッて言つてゐた。』

『誰が……』

『Mだか、Hだか忘れたが、此間、そんなことをちよつときいたッけ。』

『何うしてゐるね。』

『それまでは知らない。』

『まだ、一人でゐるのかしら。』

『さア。』

要領を得ないSの答であつた。

私は更に一歩突込んで、

『子供は何うしたえ？』

ぢつとSの顏を私は見た。

Sは伏目になつて、『何うしたかな。』

『もう大きくなつた筈だな。十三四になるな、もう。』

『さう。』

Sは成るたけそれを避けるやうにした。私はその態度に、ある大きな研究の材料を得たやうな氣がした。事に依ると、この男は何處かで、また何等かの方法で、Kの細君と關係をつゞけてゐるかも知れないと私は思つた。或はその關係を切ることの出來ないために、今も獨身で、表面には常に情婦を澤山に持つてゐるやうな顏をしてゐるのかも知れない。またKの細君にしても、矢張その關係を絶つことが出來ないがために、かくさないで好い身をかくしたり、時には田舍に行つたり、東京に來たりしてゐるのかも知れない。また、さうであるがために、十二年經つた今日、Kの死因までが私や私の友達の心に偶然に蘇つて來るのかも知れない。かう思ふと、私は一種の暗い不可思議の念の總身に漲つて來るのを避けることが出來なかつた。

また、つゞいて、さうした祕密の重荷を一生負つて、離れようとしても離れることが出來ず、卽かうとしても卽くことの出來ない暗い戀の二人の苦しみを想像せずにはゐられなかつた。その地獄の苦しみと歡樂とが私にある怪奇なロマンチックな繪を展げて見せた。

その會の間、私はつとめてSから眼を放さなかつた。そのいやに靑白い皮膚、何處かに影を帶びたやうな表情、Kの血が女を通じてそこに入つてゐる肉體、果して私は豫想した通り、當事者は竟にその持つた罪惡をかくすことが出來ないことを思はずにはゐられなかつた。私はわざ〳〵此處にやつて來てSに逢つたことを喜んだ。私は私の空想の單に空想でないことをそれとなく意識した。

Sが私に對して、始めは疎々しく、中頃は傲慢に、最後は媚びるやうな形を呈して來たのも、私に、私の想像の誤つてゐないことを思はせた。

Sは寄つて來て、

『舊交を溫めませうぢやありませんか。』

かう言つて私に盃をさしたりした。

九

それから二三日經つて、いつか一緒に話した男から、小さな包が屆いたのも不思議な念を私に起させた。その包の中に、Kの日記、——日記と言つても、小さなポケット用のものに、唯、その日その日の用事しか書いてないやうなものであつたが、それでもそれが入つてゐるのが不思議であつた。それを送つて來た男の手紙には、『これでは、別に何もわからないが、兎に角送つて見る。』と書いてあつた。

私は仔細にその日記を調べ始めた。

そこに記されてあるのは、死ぬ四年前のものが一册、二年前のものが一册、死ぬ年の月の前々月まで書いてあるのが一册、これだけしかなかつた。それに、送つて來たものも言つてゐるやうに、成ほどちよつと見ては、何の參考にもならず、平々凡々なものであつたが、それでも、私はこれを手にしたことを喜んだ。

何が書いてなくとも、兎に角、Kが死ぬ二月前まで、これを座右に置いたといふことゝ、その小さい日記にかれの手が觸れたり心が觸れたりしたといふことが、私には意味があつた。Sに私がぢかに逢つて見てそこから得たと同じやうな生きた材料を與へられるに相違ないと思つた。私は何遍もそれをくり返して讀んで見た。

しかし、日記の表面にあらはれたところでは、Kの死因に就いてすぐれた材料になるやうなものは何もなかつた。『——日、晴、S來る。』——日、曇、九段に行く。』などゝ書いてあるばかりであつた。Sのやつて來たことなども度々その中には見えてゐたが、何等詳しい內部の爭鬪はそこから探ることは出來

なかつた。

私は初めは日附を詳しく調べた。また、友人の訪問に注意した。その度數に注意した。細君のことも ちよいちよい書いてあるが、それも極く簡單で、Y子外出など丶書いてあるばかりであるが、それにも 注意の眼を向けた。

初めは氣が附かなかつたのであるが、單なるいたづら書きと思つて見捨て丶置いたものであるが、日 記の欄外またはその周圍に、いろいろなものが書いてあるのに私は段々注意して行つた。

△が書いてあつたり、×が書いてあつたりした。そしてその符徴に、圓點が打つてあつたりした。火 の燃えた形を書いたもの、横線を細かく網のやうに書いてあるもの、菫の花の形をしたものがぽつつり 一つ書いてある頁、または眼が二つ大きく書いてある頁、段々見て行く中に私ははつと思つた。これだ と思つた。このいたづら書き、または符徴、火、花、さういふものに、かれはその苦惱の形を書き留め て置いたのではないか。或は女の心のあらはれ、祕密のあらはれ、其時々の苦悶の形、それをかれはこ の象形であらはしてゐるのではないか。

何のために？　自己に取つても、深い祕密があるがために。日記とは言ひながら、猶それも人に見ら れる恐れがあるがために。またはその伴侶である細君にも見られないために……。更に進んでは、死後 も人に判じられないために……。

『さうだ！　それに相違ない！』

かう私は心に叫んだ。

それ以來、そのわからない日記が次第に私にはわかつて來た。Sの來た日の欄外には、さうした符徴 が殊に多かつた。また細君の外出して行つた日には、ハアトの形の千變萬化などが書かれてあつた。そ れに、點が二つ打ち三つ打つてあるところが處々にあつた。それは何か深い事實を心覺えに記して置い たものに相違なかつた。

そして、かうした符徴は、最初の一册には少しもなかつた。二册目も僅かにその終りの方から、少し づゝ、火の燃えた形だの、眼だの、鼻だのが書いてあつたが、それが、三册目、卽ちKが死ぬ年の一册 になると、到るところに一面に書いてあつて、？の印を打つたものも非常に多い。ドイツ語とも英語と もわからないやうなものも澤山に書いてある。

私は人間の心の奥にかくれた暗い心理の混亂した形をまざまざと眼の前に展いて見せられたやうな氣 がせずにはゐられなかつた。そこにはあらゆる祕密の苦痛、快樂の苦痛、捉へられたもの丶苦痛、養湯 を呑ませられたもの丶苦痛、または氷の上に一夜坐つてゐるもの丶苦痛などがすつかり一つの繪になつ てあらはれて來た。

『たしかにさうだ……それに相違ない……Kの死は、病死ではなくつて、確かに自殺であつたのだ。

かう私は絶叫した。

私は深い深い溜息をついた。人間の心の奥の祕密が地獄の繪を私に思はせた。暗い暗い心持がした。

私は順序として更に、KとSと細君との間に起つた悲劇、それがKが死んだ後、今度はSと細君に移つて行つたさま、地獄の劫火の中を二人して翔けて行かなければならなくなつたさま、それが或は今日までその苦痛と歡樂とがつゞいてゐるさま、更に深く、墓の中のKにまでそれが動いて行つてゐるさま、更にそれが私と私の友達の心に生返つて來てゐるさまなどを私は想像した。私は深い心の顫動を覺えずにはゐられなかつた。

そしてその暗い地獄の繪卷の中に、一段際立つて私の眼に映つて見えるのは、さうしたあらゆる罪業の祕密を深くその小さな胸の中に押し包んで、その一生を劫火の中に過して行く美しいその細君の姿であつた。平生かの女のさしてゐた白い薔薇の簪はその暗い闇の中に微かに見えた。

十

Kの細君には、私はつひぞ出會したことはなかつたけれど、苟くも生きてゐる以上、または東京に現にゐるといふ以上、何處かでぱつたり出逢はないとも限らなかつた。

私はその場合を想像した。或は人込の雜沓した町の四辻、或は電車の中、または賑かな大きな呉服屋

の一間、さういふところでぱつたり逢つたら、何ういふ氣がするだらう。ツルゲネフのやうに、これもひろい人生の一斷面だといふ風に考へて哲學的にすましてゐられるだらうか。私にはさうは考へられない。では、世間の多くの第三者の人達のやうに、冷かに笑つてそれを通り過ぎて了ふであらうか。それは猶更私には出來ない。私の今の考では、Kの細君から、口づからその重荷の苦痛であつたことを聞いて、そしてその祕密の苦惱を救つてやりたいやうな氣がした。

不可思議の中に咲いた白い花、その花が白いがために、闇は全く深くなるのではないか。祕密の花園であるがために、そこに地獄の暗い影がさして來るのではないか。運命だ！　などと言つて。淺く片附けて了つてゐられるだらうか。

Sには、私はもう二度と逢はうとは思はない。しかしKの細君には、一生の中には、一度逢つて、そしてその重荷を卸してやりたいと心から思つてゐる……。

一つの空想

一

その日は曇つてゐたからでもあらうけれど、前に展げられたG湖の姿は、何とも言はれないさびしさに私の心を誘つた。私の心はそのまゝ暗い淵にでも引込まれるやうな氣がした。

長い間の憧憬、さまざまに想像した湖の姿、それにさしわたつた朝日夕日、私は十年に近い年月の間、何んなにその湖水に對して空想を逞うしたか知れなかつた。私は夢にも見た。幻影にも見た。ある時などは、現に歴々とその湖水の姿を眼の前に浮べた。否、私は何遍その湖の畔に立つて、ロマンチックな物語の想像に耽つてゐる私の姿を頭に描いたか知れなかつた。

『一生の中には何うかして一度は行つて見よう。假令、何んなに忙しい世の中であつても、また假令何んなに貧しい、生活に追はれるやうな自分の身であつても……。そしてそこに半月なり一月なり滯在して仔細にその址を探つて見よう。さうしたならば、乾度、面白いことがあるに相違ない。』かう思つて

長い辛い思ひのまゝにならない生活を送つて來た。

漸くにしてその時が來た。一月をそのG湖の畔に過しても差支ないやうな時はやつて來た。私はあらゆるものを捨てゝやつて來たことを思ひ起した。長い、長い、退屈する汽車を私は乘つて來た。そしてその汽車の果てたところから、また長い長い路を、乘合馬車に搖られながらやつて來たことを私は思ひ起した。

一夜はさびしい田舍に寢た。その旅舍の主人は話した。

『さうですな……。好い宿屋なんかありませんな。何しろ、さびしいところですからな。此處等よりは、もつとぐつとひどいところですから。』

『でも、昔は榮えたところだッて言ふぢやないか。』

『昔つて、いつのこんだんべえ？　ついそんな話はきいたことがねえが――。』

『古いことかも知れないけれども、G湖の海の入口は、大きな港だつていふぢやないか。そして、此方には、大きな王樣の都會か何かゞあつて、湖水が外國の船や何かで一杯になつたことがあるッていふぢやないか。』

『そんな話はきかねえな――。』

『さうかねえ……。知らないかね……』私は考へて、『しかし、それに似た話はないかね。そんな大き

な都でなくつても、殿樣か誰かゞゐて、外國との取引をしたとか何とかいふことが――。』

『知らねえな。』

『さうかねえ。』

爲方なしに、私はその話を切つて了つた。更に話題をかへて、

『でも、Gといふところは、町にはなつてるんだね？』

『なつてゐるもんかな、町などに……。村も村も、ひどい村だア。』

『産物は？』

『米は少しは出來るがな。濕地で、質がわるいなア。G米ッてな、此處等でも、評判のわるい米だ。』

『魚類は？』

『わかさぎが少し獲れるなア。鯉も、鮒も、鰻もあるにはあるが、そんなに好くはねえ。』

兎に角、それでも、そこでG湖に對する多少の知識を得たことを私は思ひ起した。私はまたそこから七八里歩いた。そして、ある立場から、再び身を乘合馬車に託して、夕暮近くやうやく此處にやつて來た。

馬車を下りて、そして村外れまで歩いて來ると、漸くそのさびしい、錆色をした湖水があらはれ出して來た。

私は湖の周圍をぐるりと繞つてゐる低い山巒を目にした。その山巒にところどころに鼠色の雲が靡いて下りてゐるのを目にした。潟湖の特色とも言ふべき海の決水口の方には、曇つた空の間から、落日のさびしい光線が微かに洩れて、それがわびしく湖の半面を染めてゐるのを私は目にした。

馭者の言つた通り、少し行くと、果してそこに小さな渡船小屋があつた。

爺さんが一人さびしくそこに坐つてゐた。

『Gへは、此處から渡つて行くんだね？』

『さうだ……。』

かう言つたきり、あとは何も言はなかつた。船はもう出るか、それともまだ間があるか――それを訊いても、更に要領を得ないので、爲方がなしに、私はまたそこから出て來た。

あたりには、蘆荻が一面に連つてゐた。そしてその白い花の上には、夕風が微かに渡つてゐた。そこには藻もあれば、水草もある。澤瀉のやうな綠の葉を重ねたやうなものもある。そしてそこには、黑いと言つて好いか、それとも鐵色と言つて好いかわからない水が、初めは微かに夕日を涵し、段々遠くなるに從つて、次第に鼠色になつて行つてゐるのを私は見た。Gの村は、丘のかげにでもなつてゐると見えて、そこからは何等の面影も見えなかつた。

二

今はかうしたさびしい湖の畔であるのに拘らず、そこには營てある帝王の覇業が營まれたといふのである。正史にこそ書いてはないけれども、その湖水の海に通じたところは、外國の貿易港として、内地の船も外國の船舶も、一杯にそこに滿されてあつたといふのである。否、そればかりではなかつた、そのある帝王の覇業は、かなりにひろくその威を振つて、一時はその附近十餘箇國をその支配の下に置くことが出來たといふことである。

しかしさういふことを私は最初何處から知つたかと言ふのに、それは『G湖沿革誌』といふものを、あるところで私が見たからであつた。勿論、それは寫本で册數は十三册あつた。ところどころに拙い挿畫なども入つてゐた。

ある時それを私に出して見せたのは、おゆきといふ二十四五の眉の美しい女であつた。

『こんな本が、昔から、私の家にあるんですが、何かにならないでせうか？　貴方なら、かういふものの本當のこともわかるだらうと思ふんですが――。』

そのおゆきはかう言つて私に見せた。

私は何の氣なしに、唯、手に取つて見た。最初は唯、單純な鄕土誌位に思つた。その土地に住んだ昔の人が暇に任せて書いて置いたものだ位に思つた。しかし讀んで行く中に私は段々心を惹かれた。果してG湖の附近にかうした古い沿革があるのかと思つた。あるなら、こんな面白いことはないと思つた。

『面白い本だな。どうしたんだ、一體、この本は？』

『昔から、家にあるんです……。これだけは寶物だから、無くさずに藏つて置かなければいけないッて言つて、代々箱に入れて持ち傳へて來たんです。』

『ぢや、お前の祖父さんとか、曾祖父さんが拵へて置いたのか？』

『祖父さんとか、曾祖父さんとか言ふよりも、もつと、もつと前からあつたんです。何でも六七代、もつと前から、寶物として傳へられて來てゐるんです……。價値のあるもの？』

かう言つておゆきは眼に美しい表情を湛へて訊いた。

『價値があるとか、ないとか言ふよりも、面白いもんだね。』

『さう。』

かう言つたが、また笑つて、『ぢや、矢張、寶物にして取つて置く方が好いのね。』

『それはさうだね……。』

私は一歩を進めて、

『それにしても、お前の家は、もと、そのG湖の近所に住んでゐたのかね？』

『さうかも知れませんよ。祖父さんの代には、もう、江戸で、立派に暮してゐたんですけども、何でも、元は、津輕の方の出だッて言ひますから――』

『兎に角、それに相違ないだらうな……。おまへの先祖の六代だか七代だか前の人に、そこに、そのG湖附近に住んでゐた人があつて、その人が、丹念に、その土地をかうして書いて置いたに相違ないだらうな……。兎に角、面白い本だよ。かういふ本は、個人で藏つて置くよりも、大學とか、然るべき圖書館とかに寄附して置く方が好いんだがな……。事實か、何うか、わからないけれど、めづらしいことが書いてあるよ。』

『何んなこと？』

『その田舍の湖水の畔に、東京のやうな賑かな都會があつたなんて……。』

『それは本當なの？』

『それは何うだかわからないけれど――とにかく面白いことだからな。』

『金にはならないの？』

おゆきはまた笑びながら訊いた。

『金にやならんね……。しかし、金よりももつと貴いもんだよ。』

『金にならなくつちや、つまらない。いくら貴いもんでも、いつまで取つて置けば金になるとか何とか言ふんなら、面白いけども……。』

『眼目だな、無學な女は――！』

その時私はこんなことを言つて笑つたことを覺えてゐる。

G湖の畔にある廢都の墟が段々深く私の頭に染み込んで行つたのは、私がその本に次第に深く讀み耽つて行つたからであつた。おゆきの家の二階に通つてゐる間、私はいつもその昔の『G湖沿革誌』を私の周圍に出して置かせた。それを私は起きても讀み、寢ても讀んだ。私とおゆきとの戀心は、いつもその廢墟を思ふ心に雜り合つた。時には私が餘り熱心に讀み耽つてゐるので、

『いつまで讀んでゐるのよ。』

かう言つて、おゆきは私の手からその本を奪ひ取つたりした。

それにしても、私は何年、そのおゆきの二階に通つて行つたであらうか。やさしい靜かな、しかし明かな小さな心！　さびしい涙脆いこの世に長く存在してはゐられないやうな眼！　かう思ふと、急に、おゆきの病んで死んでいつた時の朝のことなどが思ひ出されて來た。

『何うしたの？　貴方は？』

かう言つて母親の泣いてゐる顏が私を驚かした。

『旅に行つてゐたもんだから――。』

『おゆきは死にましたよ。逢ひたい、逢ひたいッて言ひづめに……』

かう言つて母親は泣いた。私は泣くにも泣かれなかつた。私は慌てゝ二階に上つて行つた。おゆきは靜かに……靜かに、死んだとは思はれないやうにして、そこにいつものやうに横になつてゐた。觸つて見た時には、體はまだ溫かかつた。『おゆき！　おい、おゆき！』かう私は體を搖つて見た。おゆきはいつものやうに、眼を明いて、笑つて返事をしさうで爲方がなかつた。

三

渡船小屋の方で、人の聲がしたので、其の方へ戻つて行くと、果して、其處に蘆を刈りに來たらしい女達や男達が頻りに何か冗談を言つて笑つてゐるのを私は認めた。

女は脚半を穿いて、手甲をはめて、てんでに長い鎌を持つてゐた。刈つて來た蘆の束ねたのが五つも六つもそこに並んでころがしてあつた。

皆な、私と一緒に、湖水をわたつて行くものらしかつた。

『おんあん、奢んなよ。』

かう上さんらしい女が傍の二十五六の岩乘な若者に向つて言つた。

『馬鹿な！』

『馬鹿なもねえもんだ！　なア、お虎さん、なア。散々、人に見せつけて、お照つ子はまア女だて、しやうがねえが、お前は男ぢやねえか。男で、いちやついたら、奢るんが村の法だぞな。』

『馬鹿な！』

若者はいくらか顏を赧くしたやうにしてまたかう言つた。

『お照つ子、何うだ？』

女の方は却つて、づうづうしく、

『奢るともな――！』

『ハ、ハ、ハア……お照つ子の方がきついや。』

かう言つて皆なが笑つた。

そこへ、私が入つて行つたので、女も男も同じやうに口を噤んで了つた。

中折帽にトンビ、それだけでも、此處等あたりにつひぞ見かけたことのない人であるのがわかつたらしく――また何ういふ旅客で、何うしてこんな田舍までやつて來たのかを探るといふやうに、ぢつと一樣に私の顏を見た。しかし、それだけで、かれ等は何も私に言はなかつた。

暫くしてから、

『おんさん、もう、行くべえや？』

かうその群の一人の男が、默つて坐つてゐる爺を促した。

『うん……』

爺はかう答へたが、しかしなほ容易に立上らうともしなかつた。

また、そこに同じ扮裝の女が二人入つて來た。爺は漸く立上つた。

『もう、これつきりだんべえか――？』

『さうだな……お玉つこに、お秀つこ、』かう數へて見て、『あゝお鶴がゐねえ……。だけど、お鶴は、すぐは來めえ。また一時間もそこらで遊んでゐべえや、屹度、なア、お定……』

『おらア知らねえよ。』

かうお定は突放すやうに言つた。

『おめえ、知つてべえがな？』

『知らねえ……。』

『まア、行くべえ……。』

かう他の一人が促した。

で、爺は立上つて、渡船小屋の陰から艫を一艇擔ぎ出して、そして皆なの先きに立つた。

女達も男達も皆な蘆の刈束を背負つて、そして舟の繫いである方へと行つた。

おゆきのことが頻りに私には思ひ出されて來てゐた。その美しい表情に富んだ眼、そのひろい利口さうな顏、ことに、私の心にぢつと海綿のやうに染み込んで行つたそのやさしい心！　G湖のその廢墟の忘れ難くなつたのは、無論私に取つて、その『沿革誌』の中の色彩の濃いロオマンスや、址や、またはそこに對する好奇心や、その他いろいろな考證癖も與つて力があつたのに相違なかつたけれども、しかもその戀しい女の悲しい追憶も、そのG湖に對する憧憬を深くしたには相違なかつた。

私は古い舟の船首のところに腰をかけて、村の男女達の何か頻りに騷ぐのを餘所に、湖上遠く微かにさし添つてゐる曇り日の夕日の影をぢつと餘念なく見詰めた。

そこには、それとなしに、おゆきの顏やら姿やらが、ぼんやり浮んで來てゐるやうにすら思はれた。

舟は靜かに蘆荻の繫つたところ、藻の一杯生えてゐるところから次第に湖の中心へと出て行つた。それにつれて、初めは竿、次ぎには櫂、それから艫といふ風に、船頭の爺は頻りにその漕ぎ方を變へて行かなければならなかつた。

思ひもかけないところから、一羽の水鳥がばたばたと飛び出して、夕日の淡い影を涵したしんとした水の上に、長い羽を曳きながら、やがて高く高く彼方に飛んで行くのが見えた。

私は私の一番近いところにゐる中年の男に訊いた。

『かど屋ツていふ旅籠屋がGにありますか？』

『え、あります。』

『好い旅籠屋ですか?』

『好いにも、わるいにも、かど屋一軒きり宿屋ッて言ふものはGにはねえだな……。』

『さうですか……そして、その家は湖水に近いですか?』

『湖水に近いこともねえだ……。二三町あるでな。』

『ぢや、そこから湖水は見えないですね?』

『見えねえな。』

私はそれきり話をやめて了つた。古い舟の艫の音が頻りにあたりに響きわたつてきこえた。

暫く經つた。

今度は向うから訊いた。

『Gに泊んのかね?　今夜?』

『さう……』

『何の用かね。鑛山の用かね?』

學校の敎員ではなし、郡役所の役人ではなし、何うしても、鑛山に出入するものか何かにしか私は見られなかつたのであつた。

私は唯笑つてゐた。

『鑛山は、何方に行くだね。龍飛(たつび)の方かね。』

『いや、鑛山の人ぢやないんだ、僕は。』

『おや、さうかね。鑛山へ行く衆ぢやねえんかね。それぢや、山林のお役人かえ?』

『いや、さうでもない……。』

『何だな?　それぢや……』

『唯、少し、用事があつて來たんだ……。』

かう言つた私は、つゞいて一週間、少くとも十日、殊によれば一月位此處にゐたいつもりだといふ話をして、何處か好いところがないかといふことをかれに訊いた。

『そら、あんべえよ、いくらも……。校長さんとこでも、村長さんとこでも、何處でも賴めば置いて呉れないことはあんめえ。』

『何處か靜かなところが好いんだが……。』

『靜かなところなら、何處でも靜かだんべ。かうした田舍だでな。かど屋に行つて、きいて見るが好いだ。あの爺、さういふ世話をするのがすきだで……。』

私はふと、おゆきの姓を思ひ出して、

『村に、米山ッていふ姓の家はあるかね？』

『米山？　あるどころぢやねえ、村の三ッ一は米山だ……。』

『はゝア……、さうかね、そんなに、米山ッていふ姓が、此處には多いかね。』

『何でも、米山ッていふえらい人が昔此處にゐたさうだで……。』

『ふむ。』

潤い、潤い、直徑にしても一里はあらうと思はれる湖水は、次第に對岸の深く入込んだ丘や、その丘の上に更に聳えた山や、谷間に靜かに沈んで行つた夕暮の雲や、Gの村の一部と思はれる人家などに近寄つて行つた。此處等あたりから見ると、湖の決水口、卽ち海に通じてゐるあたりが、ひろびろと一目に打渡されて、波の音が遠雷の轟きでも耳にするやうに佗しく凄じくきこえて來た。

次第に村の一部の人家が見え出して來た。わびしい低い茅葺の屋根に夕炊の煙の絡むやうに靡いてゐるのが見え出して來た。埠頭が見え出した。渡船小屋が見え出して來た。夕暮近い空氣の中に焚火の赤く燃えてゐるのが見え出して來た。

四

私はその舟の中で聞いたかど屋といふ旅舍に二週間もゐた。

汚ない家ではあつたけれども、その離れのやうになつてゐる奥の一室が、丁度複雜して入り込んでゐる丘陵に面してゐて、いかにも靜かに落附いてゐられるやうな感じを私に與へたので、他に、もつと好い家が二三軒はあつたにも拘らず、兎に角私はそこに自分の荷物を置くことにした。

私はその窓の下に小さな庭のあるのを發見した。菊の花の白く夕暮の空氣の中にあらはれてゐるのを發見した。錦木の赤い實に、朝に、晝に、山から小鳥のやつて來るのを發見した。隣の桔槔がギイと音して下る度に、其處に、田舍にはめづらしい十八九の容色よしの娘が筒袖姿で水を汲んでゐるのを發見した。否、そればかりではなかつた。そこに私のゐるのを見て知つてゐながら、別に羞かしいとも何とも思はずに、頻りに鄙びた土地の唄を口にしてゐるのを發見した。

ある時私は女中に訊くと、

『え、さうだ……娘だア、あそこの……。村でも評判な容色よしだアな。』

かう女中は土地訛の言葉で、垣の外を見ながら言つた。

『本當に、好く唄つてゐる娘だよ。始終、何か唄つてゐないことはないよ。まるで小鳥か何かのやうだよ。』

『唄がうめえだで……。』

こんなことを笑ひながら言つて、そして女中は向うに行つて了つた。

私は來たあくる日から、その廢墟のあとを探ることについて力を惜まなかつたことを思ひ起した。私は村の重立つた人達を訪ねた。あらゆる方面からその址の話を聞き、また、その所在を探らうと心がけた。しかし、さうした沿革については、村では誰も知つてゐるものはなかつた。その話をすると、誰も彼も、皆な不思議さうにして頭を傾けた。

『そしてそんな本があるんですか。それを貴方はお持ちなんですか。それは面白いですね……。へえ？　大學の史料編纂でもそんなことを言ひましたか。へえ？　それは面白い。』

校長もかう言つて唯めづらしがるばかりであつた。

『ぢや、址ツていふものは、ちつとも殘つてゐませんな？』

『殘つてゐるとかゐないとかよりも、丸でさういふ話は、今日まで、一度だツてきいたことはないんですから。』

『誰か、老人か何かで、さういふことを知つてゐるものはないでせうか。兎に角、寫本にしろ、何にしろ、さういふことを書いた本があるんですから……。』

かう私が言ふと、

『聞いて見るには見ませうけれども、何うですかな。ゐますか、何うですかな……。そして、その寫本は、今から何年前のものといふ鑑定はついてゐるんですか？』

『大學の鑑定では、三四百年前のものだらうツて言ふんです。』

『その本の書かれたのがですね？』

『え、さう……』

『で、その事實についての鑑定は何うなんです？』

『それはよくわからない……。そんなことはないだらう。津輕の藩のことでも誇張して書いたんぢやないか。と、まア、かう言ふんですけれども、その前のことは、歷史にも、書類がなくてよくわからない。或はさうした大きな覇王がゐたこともないとも限らない……。それに、もう一つ有力なことには、何かの本に、G湖附近が一時、外國との貿易の中心になつたといふことが書いてあることです。だから、南北朝、もう少し前に、さういふ覇王が此處に都を開いてゐたといふことも、或は事實かも知れないとも言ふんだ……』

『大學の人がですか？』

『え。』

『それは面白いですな。』

『それで、私は、一度は是非此處に來て見たい、そしたら、いくらかは、さうしたことがわかるだらう、さう長い間思つてゐたんです。そして、今度、初めてやつて來て見たんです……。』

『さうですか、それは難有い……。ひとつ、私達も本氣になつて、あちこちをきいて見ませう。』

かう誓つたのは、校長ばかりではなかつた。村のあらゆる知識階級――勿論知識階級と言つても、村長とか、分署長とか言ふものであつたけれども、兎に角、さうしたあらゆる人達がそれについては力を惜しまないといふ契約を私にした。從つて私の持つて來た十三册の『沿革誌』はそれからそれへと、さういふ人達の手許に借りられて行つた。

校長は度々私の旅舍にやつて來た。何うも何處をきいても、さうした手懸りはないらしかつた。一番年寄の酒屋の隱居にきいて見ても、さういふことは知らないと言つた。校長は言つた。『しかし、沿革誌に書いてある地名には、昔あつて、今はない地名などもあるんですからな。何うも、虛構された事實とは思はれない……。現に、此間も、一々、實際に當てゝ見ましたが、ちやんと合ふんです。都のあつたあたりも、大抵、見當はつくんです……。』

『さうですか、つきますか……。』

かう言つて私は思はず乘出して、『ちやんと、地名や。地形が合ふんですね？』

『それは合ひます……。あの本で見ると、丁度、湖水の奥に、一ところ臺のやうになつてゐるところがある。そこがその覇王の宮殿のあつたところになつてゐますが、そこは好いところです……。いかにも、さうした宮殿でも出來たやうなところです……。』

『そこですね？　覇王が美妃十數人を圍つて置いたといふところは？』

『え、さうです。』

『それから、町の具合は？』

『ずつと、それから此方まで、大きな町になつてゐたやうです。』

『無論、礎とか、何とかいふものはありませんな？』

『ありません。』

『さういふものがあると好いんだけど……。』

『餘程、さがさせては見ましたが、何うもありません。』

私は話頭を變へて、

『そして、あの方は何うしました。沿革誌の作者の方は？』

『矢張、わかりませんな。』

『しかし、あるところまではわかるでせう。米山姓のある一家が、百五十年乃至二百年前に江戸に行つて、大きくなつたといふことはわかるでせう？』

『何うも、それが曖昧なんです……。さういふ家はないことはないさうですけども、その時分、江戸に出て大きくなつた米山姓の家は、二軒も三軒もあるさうですから……。大抵はその分家の方だらうッ

て言ふには言ふんですけど……。しかし、それだけは、まア、何うやら彼うやらわかるにしても、沿革誌はその人が書いたのではなく、その前、何の位の年代の人に由つて書かれたか、それがわからないんですのが、何うも困りますよ。』

『それは、さうですね。』

『しかし、その寫本が、此處から出たものであることだけは確かですな。曾て此處に住んでゐたものが、その事實を書き殘して置くつもりで、さうしたものをつくつて置いたものであることだけは確かですな。』

『さうですね。』

私はかう言つて、深く考へ込むやうな心持になつた。

五

その翌日は、日曜日だつたので、私は校長達と一緒に、その宮殿のあつたらしい址のところへと出懸けて行つた。

それはほんの下の方の一部が畠になつてゐるばかりで、臺と言はれたところは、あら方細い篠や、草などの繁つてゐる藪地になつてゐるのを私は目にした。幸ひにそれは、風もない暖かな好い晩秋で、さ

うした探討には持つて來いといふ日和であつた。私達は學校の小使に、ビイルの罎や、莚などを持つて行かせた。

成るほど、そこからは湖水が一目によく見えた。海と湖水の相交錯してゐるさまも明かなれば、此方に深く入り込んだ湖水の奥の方もそれとはつきり指さゝれた。錆びてはゐるけれども、またさびしい湖水らしい感じは、何うしても除くことは出來なかつたけれども、それでも何處か靜かな美しい、世離れた藝術的の感じがしてゐた。帆がさびしく一つ通つて行くのが見えた。

『こゝがさうだつたとすると面白いですな。宮殿の室からは、何處からでも、この湖水がはつきり見えた筈ですからな……。此處に美しい女などを置いて見ると、何だか詩か、繪のやうな氣がしますな。』

教員の一人は、こんなことを言つて、私の方を見た。

校長は校長で、

『さうだつたかも知れませんな……。何うも地形がちやんと合つてゐますからな。それに、こゝから海を眞直ぐに行けば、シベリアはすぐなんだから、貿易なども此處から盛んにやつたかも知れませんな。』

かう言つて指さして、『何うも、さうらしい。これから一方はあの山の下まで、一方は湖にずつと添つて賑かな町であつたらしい。何うもさうらしい。てなくつては、かうして、ちやんと珍らしい感じが殘つてゐるわけはない。』

『さうですな……地形から押して見ると、何うもさうらしい氣がしますね。』

私達はこんなことを言ひながら、臺の草藪、笹藪の中を縱横にわけて歩いて見たりした。何か礎見たいなものでも殘つてやしないかと思つたり、または何となしに昔の址を偲ぶといふやうな感慨に滿たされたりして……。暫しあちこちを歩いてから、私は靜かにおゆきのやさしい心などを思ひながら、學校の小使の敷いて呉れた筵の上に腰を下した。

暫くすると、皆なそこに集つて來て休んだ。ある一人の教員は、石とも瓦ともつかないものを持つて來て、

『これは、瓦の斷片ぢやないでせうか？』

かう言つて校長に見せた。

『さア。』

『いや、それは瓦ぢやないでせう。石でせう。』

『でも、何處か瓦のやうなところもあるぢやありませんか？』

こんなことを言つて、その石を一人々々手に取つて見た。やがてビイルの罐は明けられて、それからそれへと小さなコップに注がれて行つた。

私は校長に訊いた。

『此處は僧人の所有ですか。それとも村の所有ですか。』

『無論、村のです。』

『昔からさうでせうか。』

『さうらしいですね。それも一つ古い人に聞いて見なければなりませんけども……。』

『一つきいて見て下さい。』

二時間ほどそこにゐて、そして私達は歸つて來た。湖は靜かに秋の日に輝いてゐた。

『さうでせう！　確かにさうだつたでせう。』かう校長は何遍も何遍も繰返して言つた。

六

次第に、さびしい湖水の氣分が、私の心を壓すやうにした。私は全く氣が沈んだ。一種言ふに言はれない重苦しい懊惱を總身に感じた。湖水の錆びた姿が、色が、氣分が、そのまゝ死んだおゆきの心につづいてゐるやうにも、また時には、その湖水から、おゆきの心を透し、沿革誌を透して、この自分の心にまでつゞいて來てゐるやうにも考へられた。隣の垣越しにきこえて來る娘の唄の中にも、その不可思議の誘惑が織り込まれてあるやうにも——。

私の心は
さびしい。
湖水のやうに、
さびしい湖水のやうに。

夕日がさす、
朝日がさす——時々
私の心にも、色ある雲が通つて行く。

かうその娘が唄つてゐるやうにも私には思はれた。時には、またその唄が、さびしい湖水の上を微かに——他界のある消息が微かに人間に傳へられて行くやうに靜かに、人知れず私の耳を通過して行つてゐるやうにも思はれた。私は時にはかう自分に言つた。『でなくつては、かうして、私が此處に來るわけがない。長い間、引張られてやつて來るわけがない。だから、そこには、何か不思議なことがあるに相違ない。その不思議なものが、湖水から出て、そしてそれが沿革誌を書いた人の心ともなり、おゆきともなり、この身ともなつたに相違ない……。つまり、縱には長い年月を透し、横にはひろい場所を透

して、ある不可思議なものがつゞいてゐるに相違ない。』

私は湖水の姿が、色が、氣分が益々深く私の心に絡みつき、纏はりついて來るのを感じた。ある日の夕暮であつた。私はいつものやうに、丘の方から湖水の岸へと向つて歩いて行つた。初めの中は、『沿革誌』の中に書いてあるシインや、事實や、その方に全く心を奪はれてゐたが、夕暮近く、湖の岸をとぼとぼとひとりで村の方に歸つて來る時には、もう、さうしたものからはすつかり離れて、おゆきのことばかりが私の胸に集つて來てゐた。

をりをり私は立留つて、その眼の前に浮んで來るさびしい、しかしなつかしいおゆきの姿を捉へやうとしてゐた。

やさしい眼が其處にあつた。笑つた顏がそこにあつた。かと思ふと、何か面白がつて言つてゐるやうな顏の表情がそこにあらはれて來た。しかも、いつものやうにぼんやりとしてではなく、この世にゐない人とは何うしても思はれないやうに、はつきりと——。

『不思議だ……。死んだとは思はれない……。七八年も前に、あゝして死んで行つたものとは思はれない。』

かう思ふと、次第に、その錆びたさびしい湖水が、かの女の姿のまゝであるやうな氣がして來た。かの女の悲しさも、かの女のさびしさも、またかの女の優しかつた一生も、すつかりそのさびしい湖水の

中にあるやうな氣がした。

『さうだ……さうかも知れない。湖水のさびしさが、その沿革誌を書いた人の心に傳はり、それがまたさびしいおゆきの心に傳はり、更にまた、それが此身の心に傳はつて、さうして、かうして、今、このさびしい湖の畔を彷徨つてゐるのかも知れない。』

私はぢつと立盡した。俄かにある暗示が起つて來た。それは、その沿革誌の中に書いてあるその宮殿の中の美しい妃の一人のさびしい心もまたそこに雜つてゐるのではないかといふことであつた。急に私の前には、その昔の賑かであつたさまがあらはれて來た。

そこには、矢張盡きない心の紛爭、盡きない魂の戰鬪があつたであらう。美しい人の涙も、淸いやさしい心も、何も顧慮さるゝことなく、縱橫に蹂み躪られたこともあつたであらう。恐ろしい嫉妬もあつたであらう。情の炎も燃えたであらう。欄干に凭つて、さびしく湖水に眺め入つた人もあるだらう。かう思ふと、私の眼の前には、いろいろな舞臺が――走馬燈よりも、もつと早く早く『時』といふものゝ中に陷沒して行つた無數のさまざまの舞臺が、再びそこにありありとひろげられて來るやうな氣がした。

『や、お寒う……』

突然かう傍から聲をかけたものがあつた。

私ははつとして空想からさめた。見ると、そこには校長が立つてゐた。

『や……』

『此頃は御無沙汰ばかりしてをります。何うです？　ちつとはおわかりになりましたか？』

『いや、駄目です。』

『此間、沿革誌の作者のことについて、ちよつときゝました。何でも、その米山といふ、江戸に出て大きくなつた家の三代とか前に、かなり學問が出來た人がゐたさうです。その人が書いたもんではないかといふことでした。』

『それは、何ういふ處で、お聞きになりました？』

『これは、さう大してあてになるところできいたのではありませんけれども、何うも、さうらしいツて言ふことでした。』

『事實の方は？』

『その人ははつきり言ひませんでしたけれども、何うも、それだけでは、その沿革誌だけでは、ちよつと本當には出來ないやうな氣がするつて言つてゐました。』

『さうですかな。』

それ以上に話をつゞけようともせずに、私は校長と並んで、湖畔の路を歩いた。

『寒くなりましたな？』

『さうですな。』

『雪が來るのも、もう、すぐですな。』

『本當です。』

『今月の末には、もう雪がやつて來ますか？』

『さア、毎年、來月の中頃ですな……。早い時でも、大抵來月に入つてから降るさうですな。』

かう言つたが、校長は更に言葉をついで、

『雪が降り出しちやもう災難です。來年の三月までは、丸で雪の中に埋められて暮してゐるやうなものですからな。北海道の穴熊の生活と、いくらも違つた生活ぢやありませんよ。』

『湖水も凍つて了ふでせうな。』

『三分の二は凍つて了ひますがな。それでも眞中と、海につゞいてゐるところはいくらか暖かいと見えて、凍らずにゐるところが大部分を占めてゐます。』

『さびしいでせうな、その頃は？』

『それはさびしいですな。丸で他との交通が絶えて了ふんですから……。新聞が五日位來ないことがあるんですから。』

『その間、村の人達は、大抵、何ういふことをしてゐるんです？』

『別に、ちがつたこともありませんけどもな……。繩をなつたり、筵を織つたり、この山の奥で出來る細い篠笹で養蠶の時に使ふ籠を編んだりして暮してゐるんですけどもな、つまりませんな、こんなところに住んでゐては、それこそ、空想だけでも好いから、こゝに都會でも出來たことを考へてゐたいですな。』

かうした話が長く續いた。うねうねと曲つた湖畔の路をずつと村の入口に來るまで續いた。やがて校長は鳥渡用事があるからと言つて、帽子を取つて、そのまゝ別の路を向うに行つた。

私は一人そこに立留つた。そして湖水の面から次第に夕日の餘照の消えて行くのをぢつとながめた。

七

かれは一箇月に近い滯在の間に、『沿革誌』に書いてある址といふ址は、一々實際に當つて調べて見た。私の姿は一日として其の湖畔に見えないことはなかつた。私はあらゆる細かいもの、たとへば、そこに書いてある小さな祠までをも調べて見た。私は丘の上にも行つた。そこを流れてゐる小さな川の上流をも窮めた。今では、村で、私のことを知らないものは無かつた。『あ、あれや、何か昔のことを調べに來た東京の衆だんべ。』かう畑に出てゐる人達も私を見て言つた。路で私に逢つた學校の生徒は皆な丁寧にお

辭儀をした。

しかし、いくら調べて見ても、事實らしいものは竟に一つも表面にあらはれて來なかつた。礎なども無論なければ、その址らしい感じのするものも何も出て來なかつた。調べて行つくにつれて、却つてそれを否定する材料さへ出て來た。

私はある日、いつものやうに、矢張その宮殿の址のあつたといふところに立つてゐた。それは空が低く湖水を壓してゐるやうな曇つた日で、あたりはしんとして、物象がすべて深い深い沈默に落ちて、水面に映つてゐる物の影すらも、少しの動搖をも見せてゐないやうな午後であつた。何と言つて好いか、何と形容していゝか、わびしいと言つて好いか——否、雪の來る前に必ず年に一二度はやつて來ないことはないといふ Dead Silence が、全く天地を、湖水を蔽ひ包んで了つたやうに私には見えた。

私の心にも、何とも言はれないさびしさが籠つて來てゐた。

氣が附くと、私の空想はおゆきに對する心持から、次第に、『沿革誌』を書いた作者のことの方へと偏つて行つてゐた。ふと私はあることに思ひついた。

『さうだ……さうだ。』

突然精神に響いて來るある暗示の聲に聞き惚れたやうにして、私はかう叫んで起上つた。

『さうだ……。さうだ……。それに相違ない。それに相違ない。すくなくとも、さう考へる方が事實に近い。』

かう考へると、不思議なロオマンスが私の頭に上つて來た。さうだ……。それに相違ない。私の眼の前には、さびしさうに湖畔を歩いてゐるその『沿革誌』の作者の姿が歴々と映つて見えて來た。『さうだ、それに相違ない。さびしさに、この形容することも何うすることも出來ないさびしさに、ひとり手に、さうした空想が其作者の頭にのぼつて行つたんだ……。そしてこの大きな都會や、美しい宮殿や、賑やかな港や、湖に臨んだ欄干に凭りかゝつた美女を、そこに、空中に描き出したに相違ない……。それに相違ない。』かう思つた私は、始めて此處に深い細かい心のあらはれをそのまゝ呼び返して來たやうな氣がした。

『さうだ。自分にしても、もし、こゝに、このさびしい湖畔に、一生住まなければならない運命であつたならば、屹度、さうしたシインを、自分の頭に描き出したに相違ない……。そしてそれを一つのロオマンスとして樂んだに相違ない。』かう思ふと、私は沿革誌の事實をその場所に發見せずに、却つて人間の心の中に發見したことを思はずにはゐられなかつた。

私はいろいろに『沿革誌』の作者を想像した。さびしさに堪へかねたやうな生活をしてゐたかれを想像した。單調な湖水にひとり向つてさびしく暮してゐたかれを想像した。そして、その作者のさびしい

心が、おゆきを經、その殘した『沿革誌』を經て、かうして私に傳へられて來たさまを想像した。私は不思議な氣がした。何も彼も――沿革誌の作者の心も、そのさびしい心から生れて來たロオマンスも、おゆきのやさしいさびしい心も、私のかうしてこゝにやつて來た心も、すべて、このさびしい湖水から生れ出て來たやうな氣がした。

八

私には、『沿革誌』の作者の描いた空想が再びはつきりと此處に繰返されて見えるやうに思はれた。かれはあらゆるものを想像したであらう。あらゆる人生の榮華、あらゆる人生の得失、かれの知識、學問で想像し得られる悲喜、かれの經驗で知ることの出來る運命、さうしたものをすべて、かれはそのさびしい湖畔で考へたであらう。とぼとぼと歩きながら考へたであらう。その中には、戀の歡びも苦しみもあつたであらう。嫉妬もあつたであらう。かれの人生に對する不如意もあつたであらう。私に於けるおゆきと同じやうな女が矢張かれにもあつて、時には全く憂鬱に閉されて了つたこともあつたであらう。そしてかれも矢張私のやうに、かうしてさびしく、心細く、この湖の畔を彷徨したであらう。

種々な支那の書物――その時分の知識階級の人たちの讀み耽つた支那の書物、その中のさまざまのロオマンスや悲喜劇が、いかにかれの空想に翅を添へたかといふことなども、私にはいろいろに想像せら

れた。

次第に、私は空想と事實との區別のわからなくなつて來るのを感じた。事實にのみ縋つて探つてゐた今までよりも、かう考へて來た時の方が一層はつきりとその湖畔の廢墟が私の眼の前にあらはれて見えて來るやうな氣がした。

つゞいて、私の眼には、かうした時代も時の間に過ぎ去つて、すべて異つた人達で往來されるであらうと思はれる時の湖水のさまが歴々と映つて見えた。その時にも、矢張、この湖水は、今と同じやうにさびしいであらう。同じやうに、わびしいであらう。矢張、同じやうに曇つた灰色の空を鏞びた水面に映してゐるであらう。矢張同じやうに村はさびしくそこに横はつて、夕炊の烟を丘の上に靡かせてゐるだらう。一帆の影がホワイトスワンのやうに靜かに暗い空氣の中に動いて行くであらう。そして、それを眺めた人達は、不思議なお伽噺の世界をそこに發見したやうな氣がするだらう。そして矢張、『沿革誌』の作者乃至はおゆき、または私と同じやうに、湖のさびしさにひとり手に引寄せられて行くであらう。かう思ふと何んなに微かな心でも、一本の葦の風に鳴るやうな微かな心でも、皆なそれからそれへと細かに繋がつてつゞいて行つてゐて、決して無意味に存在してゐるものでないといふことが染々と深く感じられて來た。ふと氣が附くと、何處かで靜かに唄を唄つてゐる聲がした。

私はあたりを見廻した。何處にも人の姿は見えなかつた。『はてな、何處だらう――』かう思つて私は

起上つたが、やがてすぐ下に、村の娘達が四五人で頻りに蘆荻をサクサクと刈つてゐるのを私は目にした。靜かな唄は其處から起つた。

ぬかり道

一

朝、早くかれは立つて來た。何處を見わたしても、村といふ村もなければ、人家といふ人家もなかつた。唯、雪に埋れた大きな高い山と、それに續いて割合に低い山巒がずつと長くその前に横はつてゐるばかりであつた。かれの歩いて行く路の兩側には、幹の白い葉の落ちた林が、煙でも靡いてゐるかのやうに遠く微かに連つて見えた。

霜は一面に白く地上に置いた。

かれは靜かに歩いた。まだ、朝であるに拘らず、朝日が朗らかに山の晴雪に映えて照つてゐるに拘らず、またあたりが靜かで落附いてゐて、何物も心を攪すものがないにも拘らず、かれの心は、佗しさと辛さと悲しさとで一杯になつてゐた。かれの前に横はつてゐるさびしい長い長い路——それは何處まで行つたら盡きるのだらうとかれには思はれた。或はそれは行つても、行つても、何處まで行つても、際

限なくつゞいてゐるのではないかとさへ思はれた。かれは思はず溜息をついた。

しかし、かうした路ばかりを通つて來たかれではなかつた。彼は長い旅を振返つて頭に浮べて見た。橋の袂が見えたり、さびしい町外れの人家が見えたり、美しい色彩のチラチラする郊外が見えたり、川の帆が見えたり、山裾の靜かな驛亭が見えたりした。時にはかれは高い峠の上から、はるばると眼下に連つて見えてゐる長い路を眺めた。

《何處まで行つたら、この路は盡きるんだらう――》

かうかれは思ひながら歩いた。

二

《何うしておれは此方の方へ入つて來たのだらう。》かうかれは思ひ返して見た。《さうだ……。あの汽車を、あの停車場で下りさへしなければ、かうしたさびしい路に入つて來なくとも好かつたのだ。》かう思ふと、種々な光景が心の中に浮んで來た。

《あの時、あゝ思つたのが、いけなかつたのだ……。平凡に汽車の進んで行く路よりも、人の知らないめづらしい路の方が好いと思つたのがいけなかつたのだ……。》かう思ふと、さうした心の萠芽が何處からともなく生れて來たのがかれには恨めしく情けないやうな氣がした。しかし汽車を下りて停車場を

出て來た時には、まだ、かうしてこんな方に出て來ようとしてはゐなかつた。兎に角、町を見よう、町外れあたりまで行つて見よう、そして、場合に由つたら、此處に一晩泊つても好い、またあとに戻つて次ぎの汽車で旅をつゞけても好いと思つてゐた。ところが、町の中ほどまで來ると、其處に繼立場に、馬車が一臺、もう出るばかりになつて待つてゐた。旅客が二三人そこに集つて來てゐた。

『Sの方に行くのかね？　この馬車は――』

思はずかうかれは立寄つて訊いて見た。

『さうでさ……。旦那も、いらつしやるかね？』

『いや、行くときめたわけではないけれどもね、』かうかれは曖昧なことを言つて、『いくらだね？　Sまで。』

『一圓五十錢でさ――』

『一圓五十錢？　高いなア。幾里あるんだえ？　一體、Sまで？』

『四里たつぷりありまさア。』

『そんなことはありやしまい。三里位なもんだらう？』

『何うしやして！　そんなこつちやきゝません。四里半つていふんでさ。それに、夏と違つて、今は路がわるいで――。』

『……』

かれは何か言はうとしたが、言はずに、默つて其處に立つてゐた。

《馬車に乘つて、Sまで行つたつて、しやうがない。引返した方が好い。この次ぎの汽車に乘つて、暖かな海岸の方へ行く方が好い。》かう一方では思つてゐたけれども、しかし、汽車を下りたといふことが、停車場から此方へ出て來たといふことが、そこにSの方へ行く馬車があつたといふことが、その馬車の傍に寄つて行つて、馭者と口をきいたといふことが、既に何うすることも出來ない運命をかれの身の上に齎らして來てゐた。かれはたうとうその馬車に乘つた。そしてさびしい路の方へと入つて來た。

三

煙つたやうな林に添つて、赤いものがちらりと目に着いた。

始めは、それは何だかわからなかつた。女の赤い前垂のやうにも見えた。また、赤く塗つた廣告板か何かのやうにも見えた。しかし、段々近づくにつれて、それが絶えず動いてゐるものであるといふことが大きくなつたり小さくなつたりするものであるといふことが次第にわかつて來た。

『あゝ火だ、焚火だ！』

暫く來た時、かれはかう叫んだ。

かれにはそれが不思議に見えた。この寒い霜の朝に、山の雪が人を壓すやうにあたりにキラキラしてゐる朝に、林に添つて、ポツカリ赤く小さく焚火の燃えてゐるといふことは、かれにあるサンボリックな感じを與へずには置かなかつた。それはかれの魂ではないか。その賦與された運命に向つて、勇しく邁進するために燃やされた魂の焰ではないか。

かれは何處からともなく勇氣が添へられて來たやうな氣がした。今になつては、かれに取つて、この路を突破するより他爲方がなかつた。いかやうな路であらうとも、——またいかやうな運命であらうとも。かれは次第にその焚火の方へと近寄つて行つた。

焚火の周圍には、樵夫が五六人集つて、頻りに何か話してゐた。かれ等は朝、仕事にかゝる前に、一あたり火に當つて煙草などを吸つてゐるのであつた。

かれは立留つて訊いた。

『舊道の近道があるつて言ひますが、それはまだ先きですか？』

『もう、すぐそこだアな。』

かう其中の一人が指さして敎へた。高い山に續いて連つてゐる低い山巒は既に其前に近く迫つて來てゐた。

『すぐわかりますか？』

『橋があるでな……。それを渡つたら、眞直ぐに上へ上へと昇つて行きなせい……。間違ひこはねえ。』

『さうですか。どうも難有う。』

かう言つて、かれはまた歩き出した。暫し來て振返ると、その赤い焚火は、既に下に下になつて、矢張ポツカリと澄んだ朝の空氣の中に赤く高く燃えてゐるのが見えた。

四

『こゝから舊道ですね？』

『さうです。』

上から下りて來た旅客は答へた。

急な、急な勾配で、これをのぼつて行くのかと思はれるほどであつた。それに、路は一面に柔かな深い砂で、一歩のぼれば一歩退くといふやうな風であつた。それでも、始めは、かれは勇氣を鼓してのぼつた。《これも、何うも爲方がねい。かうした運命だ！》かう思つてのぼつて行つた。

あらゆるものがすべて下に下になつた。林も、谷も、折れ曲つてついてゐる路も、何も彼も……。注意して見れば、その赤い小さい焚火も微かに見えてゐた。昨日、夕暮近く馬車で越えて來たさびしい高原が、さながら手に取るやうに見えた。

をりをりかれは立留つて休んだ。そしてまた木の根をつかんだり、石に縋つたりして一生懸命にのぼつて行つた。次第に、呼吸は切迫した。休んでも、休んでも、その呼吸苦しさを禁めることが出來なかつた。後には、一歩のぼつては休み、また一歩のぼつて行つては休むといふやうになつて行つた。心臟の鼓動が烈しくなつた。

かれのさうして立竦んだやうにして休んでゐる傍を、荷馬車の馬は、倒さにのめるやうにして、逸早く掠めて下りて行つた。そのために、――それを避けるために、かれは時々路の傍の荆棘の中に入つて行かなければならなかつた。

かれの大きな運命、このさびしい山の中にわれ知らず入つて來たといふ大きな運命よりも、それよりも、今はこの急な阪路を征服することの方が、かれに取つての第一の急務となつた。かれはこれに對して全力を擧げなければならなくなつた。さびしい路のことなどを考へる暇はなくなつた。

三分の二ほどのぼつて來た時には、もうとてものぼれさうには思はれないほどそれほどかれは疲勞してゐた。《何うして、新道をやつて來なかつたらう。少し位、近いからと言つて、こんな苦しい目に逢つてはつまらない。》こんな弱音をも吐くやうになつてゐた。かれはぺたりと地上に尻餅をついて、そして眼下に展げられたパノラマのやうな景色を眺めた。

暫くしてかれはまたのぼり初めた。

五

漸くかれは、山巒の一角をぐるぐる廻つてゐるやうなところへと出て行つた。そこには、また廣い路があつた。

『峠は、まだ遠いかね？』

かうかれは向うからやつて來た旅客に訊いた。

『もう、すぐだ……。この向うを廻ると、もう峠だ。』

『まだ十町位あるかね？』

『さア、さうはあんめい……。』

『湖水がある筈だが、峠に行くと見えるかね？』

『見えるよ。』

『難有う……。』

かう言つてかれはまた歩き出した。次第に、高原や、林や、谷は後になつて、前には、ぐるりとすぐその近くを取卷いた山巒があらはれ出して來た。山の日陰になつたところには、數日前に降つたらしい雪がところどころに殘つてゐた。

少し來たところには、國と國との境界柱が大きく立つてゐた。

『はゝア、これから先きが、Kの國になるのだ！』

かうかれはその前に立つて獨語した。と、不思議にも、今まで經て來た路よりも、これから行かうとする知らないKの國のさまざまなシインの方が、かれに親しさを增して來るやうに思はれた。しやうがない。今更此方に入つて來た運命を慨いたとて爲方がない。それよりも、これから先きにあらはれて來る知らないKの國のさまざまのシインに親む方が、その方が得策だ……。かうした心持がいつとはなしに起つて來た。

峠近く來た時には、そこには、此間降つた雪がまだかなりに多く殘つてゐるのをかれは目にした。地上にもところどころに殘つて、日の當つたところだけ、くちやくちやと泥濘になつてゐるのをかれは目にした。

忽ちかれはそこに一二軒の藁葺の屋根を發見した。つゞいて倉庫ともつかず、車庫ともつかない家屋のそこに連つてゐるのを發見した。否そればかりではなかつた。その向うに碧い碧い湖水が午前の日に美しく輝いてゐるのをかれは見た。

『あ、あれが湖水だ！』

かう思はずかれは心に叫んだ。

つゞいて、かれの頭に簇つて上つて來たことは、此處からあるところまで、五六里の間、鐵道馬車が通つてゐるといふことであつた。それに由つて行けば、Y乃至Kまで、さう大して骨を折らずに行くことが出來た。しかし、かれにはそれに乘ることの出來るやうな旅費の餘裕はなかつた。かれは何處までも歩いて行かなければならなかつた。

その倉庫らしい家屋は、その鐵道馬車の車庫であり、またその傍の藁葺屋根の家屋は、半は峠の休茶屋で、半は鐵道馬車に乘る客の集合所であるといふことが、次第にかれにも飲み込めて來た。ふと見ると、氷つたレイルの上にマッチ箱のやうなペンキの剝げた馬車が一臺既にやつて來てゐた。

日は照つてゐるに拘らず、湖水から來る風は寒く肌を刺すやうにした。藁葺屋根の日に當つたところからは、雨だれが頻りに音を立てゝ落ちてゐた。それにも拘らず、鷄はそのあたりで頻りに餌を啄んでゐた。

鐵道馬車には乘ることは出來ないけれども、ちよつと休んで、大福でも食つて行かうと思つて、かれはそのまゝその峠の茶屋の中へと入つて行つた。

かれの眼には、百年も前からあつたやうな、天井などの黑く煤けた、休むところの廣い、一隅に大きな圍爐裏に榾の燻つてゐる、いかにも峠の茶屋らしい家が映つた。かうした峠の茶屋、標式的な峠の茶屋をかれはその他に何處に發見することが出來たであらうか。やがてかれが入つて行くと、圍爐

裏の周圍にゐた村の人々は、客の來たのを見て、一人二人と上さんに挨拶して出て行つて了つた。

『まア、お當んなさい！』

そこにゐた手拭をかぶつた色の白い上さんは言つた。

『ぢや、一つ、當らせて貰ふかな。』かれはかう言つて圍爐裏の中に入つて行つた。

此時、その向うで、茶を飲んでゐた外套を着た男は、此方を見て、

『お前さア、馬車かな。』

かう言つて訊いた。

『いや——。』

『歩いて行くんかな。』

『さう——。』

『路がわるいぜ、ぬかつてゐるでな、雪が溶けたで——。』

『さうだんべな。雪が溶けて、路がわりいだんべな。』

かう傍にゐたもう一人の男が言つた。

『わりいとも、わりいとも——。』

しかし、馬車の車掌は、煩さく乘車をかれに勸めようともしなかつた。馭者は今度は上さんに話しか

けた。

『あの菜漬はいくらだつたな？』

『二圓と二貫。』

『二圓と二貫ぢや、高くはねえな。何でも彼でも馬鹿値だでな。』

『さうかな、安いかえ、あれでも……。』

『安いとも……きのふ、おらが持つて來たのは、二圓と五貫で、もつと小せいや——Yにも、Kにもう漬菜も大根もねえだで。』

其處に、村の上さんらしい中年の女が入つて來て、始めは、頻りに、家の人達と挨拶してゐたが、やがて、その車掌の傍にやつて來て、

『萬屋さん、お前さまにお願があるだがな……。』

『何だな？』

『家のあまつ子、向うの學校さ、行くやうになつたで、毎日これからお願ひしていだがな。』

『馬車けえ？』

『一人ぢやこはがつてるだで、まだ小せいだでえ。』

『ようがすとも——。』

『それから、もう一つ、お願ひがあるだ。萬屋さん、こまかいのを持つてゐべいと思つてえ。』

『小錢か。何うも、何處でも小錢がなくつて困るなア。』

かう車掌は笑つて見せたが、しかし、その下げた鞄の中には、澤山小錢が入つてゐるらしかつた。やがて、その中から、小さな札やら、白銅やら銅貨やらをガチヤガチヤ音させて出して、上さんの出す五圓札と取り替へてやつてゐた。

『どうも難有うごいした。』

かう言つてその上さんは出て行つた。

白髪の婆さんが、外から抱へて來ては入れて行く樽は、ふすふすと燻つて、青い、黄い、灰色の烟を家の中に漂はした。やがて火はぱつと燃え上つた。かれは大福を頰張つたり、茶を飲んだり、周圍の人達の話に耳を傾けたりして、やゝ、暫くそこで體を暖めてゐたが、やがて靜かに立上つて、大福の代をそこに置いたりして、再び難儀なその路へと上つて行つた。

六

路は碧い色をした湖の岸を縫つて、曲つたり折れたりしてつゞいて行つた。

日の光が映ゆくさしたり、ところどころに杜があつたり、殘雪があつたりするその路には、Yまで通

ずるその鐵道馬車の二條のレイルが、路と共に、曲つたり、眞直になつたりして、次第に開けた大きな高い山の裾野の方へと出て行つた。ところに由つては、そのレイルがギラギラと遠く日に光つて見えたりした。

少しやつて來ると、車掌が言つたやうに、果して路が泥濘になつてゐるのをかれは眼にした。林のある中は、または湖水の岸を辿つてゐる中は、雪が殘つてゐたり、氷つたところがあつたりして、拾つて歩けば、さう大して草鞋や草鞋がけを濡さなくつても好かつたが、段々高原に出て來るにつれて、深い、深い泥濘が冷めたくかれの脚に染みるやうになつた。

ふと後から馬車のやつて來る音がレイルに傳はつて響いて來た。

かれは振返つて見た。

果してさつきの馬車が――マツチ箱のやうなペンキ塗のはげた小さな馬車が、いくらか下りになつてゐる路を勢込んで此方へ走つて來るのが見えた。かれはそれを路傍に避けなければならなかつた。

さつきの車掌は、車掌にして馭者を兼ねてゐると覺しく、馭者臺に立つて、頻りに馬を鞭打つてゐるのをかれは目にした。馬車の中には、客が五人ほど乘つてゐた。

見てゐると、その小さな馬車が眞直に走つて遠くなつて行くさまが、いつまでもいつまでも見えてゐた。かれの心は益々暗く暗くなつて行つた。行つても行つても盡きぬ泥濘の路が、かれの前にあらはれて來たかと思ふと、堪らないわびしさと、辛さと、悲しさとが一杯になつて胸に押寄せて來てゐた。時には日の光がさし込んだりしてゐるそのぬかるみの中に、かれ自身の暗い心もすつかり雜り込んでゐるやうな氣がした。否、かれ自身のこれまで經て來た生活の苦しみも、女に對する苦しみも、何も彼もすべて其處に……。

いくらも行つても、その路は盡きなかつた。その泥濘は盡きなかつた。かれはかれの心が二條のレイルに連つて遠く彼方に行くやうな氣がした。何處かで休みたいと思つても、休むやうなところもなければ、腰を下ろすやうなところもなかつた。かれの衣には夥しい泥のハネがあがつた。

午に近い日影は、明るくそのぬかるみの上に照つた。

島の虐殺

一

深く入込んだ崖のやうなところに、すうと滑るやうに一隻の舟が入つて來た。そこは、樹が深く生茂つて、晝も小暗いやうなところであつたが、それから少し崖に添つて廻ると、一ところ開けたところがあつて、そこから岸に連つた岩石つたひに、島の上へとあがつて行くことが出來るやうになつてゐた。

一歩漕ぎ出して行けば、沖には凄じい波が立つて、何うしてさうした荒れわたつた海を小さなこの舟でわたつて來られたかと思はれるほどであつたが、しかも一度その狹い入江の中に入ると、潭のやうに深く碧い水が靜かに湛へて、波といふほどの波も立たず、をりをり寄せて來ても、纔かに岸の扁平な岩石の上に、さゝらのやうに碎けて行くばかりであつた。

しかし、騷がしい波の音——岩に寄せて碎ける音、岸に一面に押せて來る音、海の中で波と波とがぶつかり合つて押倒し押倒される音、さうした音響が一つになつて、ざわざわ、ざわざわと引いたり、寄

せたりしてゐる上に、密生してゐる樹木を鳴らす風の音が添つて、あたりは何となく騷々しい、落附かない氣分で滿されてゐた。沖には一帆の白いのも認められなかつた。

そつと滑り込んで來た舟からは、一番先きに、四十位な、岩乘な、いやに陰慘な顏をした男が上陸した。つゞいて、若い二十二三の男と、三十一二位の男とが上陸した。皆な肩から獵銃をかけて持つてゐた。

舟に殘つてゐた一人は、最後に上陸した男を呼びかけて、

『いゝのか？　此處らで？』

『さア。』

かうその男は言つたが、自分の一了簡ではよくわからないといふやうに先きに行つた四十位の男を呼びかけた。呼ばれた男は、二三間引返して來て、何か頻りに聲高く話したが、そのまゝ若い二十二三の男と先後して、岩の上を傳つて、向うの密生した樹林の方へと行つた。

一人の男が戻つて來ると、

『好いかな？　此處で？』

かう再び舟から問はれた。

『もう、少し奥へ入つてゐろつて——。そこぢや、何うも、外から見えるとわるいつて。成るたけ、樹

の蔭に入るやうにしてをれ。それに夕方までに、飯を炊いて置け。』

『よし、よし、それはわかつた。しかし歸りは夜だな。』

『夜だ……。それに、そこが一片付いたら、手前も上までやつて來い。舟んなかでぐづぐづしてゐねえで。』

『おらア嫌だ。』

かう言つて、舟に殘る方の男は、そのまゝ岩に繫いだ纜を解くために岸に上つて來た。

その時には、先きに行つた二人の姿は、もう全く密林の中に沒して了つてゐた。男は急いでその跡を追つた。やがてその姿も見えなくなつた。波の音が凄じくあたりを取卷いて聞えた。

二

暫く經つた後には、その舟は狹い入江の奥の、深く樹木の繁つた、外からは容易に見出されない、さびしいところに體を繫いで、靜かに波の上にたぷたぷに漂つてゐるのが見えた。

そこからは、樹間を透して、夕日に彩られた外海のかがやきがキラキラと美しく輝き渡つて見られた。たまには、沖近く石油エンジンの鮪舟が通つて行く氣勢がしたり、大きく孕んだ帆がまともに夕日を受けて通つて行つたりしたが、しかも此處に、かうした舟が——惡事を働いてゐるものゝ手下になつてゐる舟が、靜かに、人知れず隱れて漂つてゐるとは氣が附くものはなかつた。舟の中からは、七輪の烟が微かに蛇のやうに夕暮近い空氣の中に靡きわたつてゐた。

舟に殘つた一人は、三十七八の屈竟な男であつたが、吩咐けられた飯を焚いて了ふと、その儘ごろりと仰向になつて舟の底に身を倒した。『また、あの殘酷な光景が繰返されるのか。』ふとかう思つたが、それと同時に、いろいろなことが眼の前にあらはれて來て、かうしてぢつとしてはゐられないやうな氣がした。かれは腥さい殺戮の血が今もその身の周圍にくつついて匂つてゐるやうに思はれた。動物とはいへ、あの無殘な殺戮は？　あの殘酷な光景は？

かれの眼の前には、無數の鹿の殺されたさまが見えた。何疋となく——殆ど何疋となく岸から舟へ積まれたさまが見えた。しかも此處では落附いて、皮を剝いてゐるわけに行かない。さうかと言つて、この島でなしに、かれ等の住んでゐる海岸に持つて行つてそれをやるわけには猶更行かない……。それこそ忽ちその罪惡は世間に知れる。世間の人達は眼を睜つてそれを見る。國禁になつてゐる金華山の鹿を打つて來たといふことが忽ち知れる……。で、爲方がなしに、かれ等はそれを海の中でやつた。凄じい荒海の怒濤の中でやつた。それにしても、それは何といふ光景であつたらう。一枚々々鹿の皮を剝ぐために、刀も、手も、腕もすべて血だらけになつて、丸で人間がやつてゐるとは思はれないやうな殘酷なさまであつた。そして、一疋の皮を剝ぎ終ると、『惜しいな……。この肉を捨てるのは惜しいな。』かう言

ひながら、それを皆な海の中に投じた。肉の處分まではかれ等には何うしても出來なかつたのである。

成るほど、それは好い金儲けであつた。鹿の皮一枚が非常に高い値で賣れた。唯、賴まれて、斷ることが出來ずに、餘儀なくつれて行かれたかれでさへ、一月拵いでも容易に得ることの出來ないほどの澤山な金をかれ等から貰つた。皮を持つて行つて、遠い町から歸つて來たかれ等の財布は、十圓紙幣や五圓紙幣で一杯に滿されてあつた。『だまつてゐろ……だまつてゐろ、祕密を洩すと、生かしちや置かねえぞ……』かう威嚇するやうに親方が言つたり、『けども、好い儲け口だ……。あんな金箱はありやしねえ。それや、まア、行くのは骨さ。命がけさ……。しかし、命がけでなけれや、何でも旨いことは出來ねえや……。それに骨の折れるのは海の上だけだからな。鹿を捕るのは、ちつとも骨は折れないんだからな。』と言つたりした。ある日、皆なして、一緒になつた時には、『まア、しかし、餘り度々やると、わかるで、成るたけ、祕密にやらなけれやいけない。』

かう三十二三の男が言ふと、

『さうとも、滅多なことは出來ねえ。村でもな、俺達の金を持つてゐるのを吃驚してゐる奴があるだで、さういふところから、ばれて行くだで……。此間も、正公、不思議にして、何うして儲けて來た。俺らにも話せ、決して口外しねえなんて言ひくさつてゐたつけ。』

『危ねえ、危ねえ。』

かう言つてもう一人の若い方のが笑つた。

『でも、さう骨が折れずに、鹿が捕れるかなア？』

かう船頭が不思議にすると、一人は、

『何しろ、今まで人に打たれたことなんかない鹿だから。のんきなもんだ。何んなに近くまで行つて、鐵砲を向けても、平氣でのそのそしてゐるんだから。面白いやうだよ、それは——。』

『ゐることも澤山ゐるんだね？』

『ゐるにもなんにも……。金華山の表の方よりも、もつとゐるね。何疋ゐるかしれやしない。ちつとやそつと我々が捕つた位ぢやわかりやしない。』

『でも、鹿も吃驚したらうなア。』

『何しろ、鐵砲なんかにでつくはしたことのない動物だから。』

こんなことを言つて皆して笑つた。やがて、今度は、鹿の肉を捨てるのが惜しいから、何うかして、あれを祕密に處分することは出來ないものかといふことになつた。

『遠くにさへ持つて行けば、何うにでもなるんだがなア。』

かう一人が言ふと、他の一人は、

『本當だ……。捨てるのは惜しい。何んなに捨て賣にしても、一匹の肉が二兩にやなる。大きなのが

あるからな。何うだ、捨公……』かう船頭の方に向いて、『漕いで行かねえか。K浦あたりまで？』

『さアな。』

『無理かな……あの舟ぢや……。』

『あそこに行くんでさへ、命がけだでな。K浦までは、とても駄目だんべいな……。それも、五月頃の風ぎでもあれば行けねいこともあんめいがな。』

『K浦まではとても無理だ……。』

かう傍から親方が言つたので、そのまゝ皆な默つてしまつた。今度は荒した島の後の話が皆なの口に上つて來た。

『でも、わかりやしねえ。』

かう言つたのは、親方であつた。

『さうだな……。別に、あそこで皮を剝いだわけぢやなし、草位少しは寢てゐたかもしれないけれども、跡つてあとは殘つてゐやしねえ……。唯、あそこで鐵砲を打つのがきこえやしないかと思つて、氣がかりには氣がかりだが——。』

『でも、あそこらで打つたつてきこえやしねえ。あそこから、人のゐるところへは、燈臺が一番近いんだが、それだつて一里はあるからなア。そして、山の向う側になつてゐるからな。鐵砲の音なんかきこえつこはありやしねえ。』

『それは、さうだけども……何となく、氣がひけるよ。』

『燈臺や金華山の表の方は、大丈夫だが、海の上を警戒しなくつちやいけない……。』かう親方は注意深いやうな顏をして、『何うかすると、海軍の望樓のランチが通ることがあるから。』

『そんなことは滅多にない。』

『それはないけれども、注意だけはしなくつてはいけない……。それにしても、今度はいつ行かう？』

『いつでも……』

『五六日したら、行かうぢやないか……。漁に行くふりをして？』

『よし、よし。』

かう皆なが同意した。ところが、その話のあつた五日目、卽ち二度目の冒險の當日は生憎夥だしい暴風雨だつたので、それから三日延ばして漸く今日やつて來ることになつたのであつた。

『まだ、始めねえと見えるな。』

船の底に身を横たへながら、かうかれはひとりで言つてそのまゝ耳を欹てゝ見た。

しかし、この前にきいたやうな銃聲——其處にも此處にもボンボンときこえるやうな銃聲をかれはまだ耳にすることは出來なかつた。

三

次第に夕暮が迫つて來た。

船に殘つたかれが、船底から身を起した時には、大海の夕日のかゞやきは最早すつかり消え果てゝゐた。かれが横になつてゐた間は、決してさう長い間ではないと思つてゐるのに……。碧であつた海の色は今はさびしい靖びた色になつてゐるのをかれは目にした。

『何うしたらう？』

かう思つてまたかれは耳を欹てた。

ポン、ポンと二つばかり何處かできこえたやうな氣がした。それにしても思ひ出されるのは、此前の冒險の時の銃聲であつた。その盛んな銃聲であつた。四時頃からやつて來て、三時間ばかりの間に、かれ等は四十頭近い鹿を殺したのであつた。そして何の苦もなくそれを舟に持つて來たのであつた。

『今日は獸目かな……。動物でも、矢張性があるで、さうした危險のない處に遁げて行つたかな……。』

こんなことを考へながら、かれは時計を帶の間から出して見た。まだ六時少しすぎたばかりであつた。樹の間から微かにさして來てゐた夕日の最後の光線が、チラチラと碧い淵の上に動いた。小さな波が寄せてはまた返して行つた。

ポンポンとまた二つばかり銃聲がした。

『いよいよやつてゐるな。』

かう思ふと、一方無邪氣な鹿が殺されてゐるのを憐れむやうな心持が起つて來ると同時に、自分等の事業の成功して行くのを喜ぶ心が起つて來た。

かれも出かけて行つて見ようかと思つた。かれは崖の方を見上げた。何處か、そこらから上つて行くやうなところはないかと思つて、あたりを見廻した。しかし、そこは崖が高く岩が多く、それに、こゝらの岩は崩れ易いので、滅多にそこに上つて行くことは出來なかつた。出懸けるならば、矢張、さつきのやうに、船を向うに廻して、そこから上陸して行くより他爲方がなかつた。かれは躊躇した。『行つたところで爲方がない……邪魔になるばかりだ……それよりも、此處にかうしてゐる方が好い。』かう思つて、かれは半ば立ちかけたのを再び元のまゝにした。銃聲は次第に高くきこえ出して來た。

『草刈りなんかが來てゐると困るな。』

かう思つて見たが、今時分、二里もあるこの島の裏海岸に、さうしたものが來てゐようとも思はれなかつた。

かなりに近いところ——その崖の上の密樹の中あたりにも、一發、二發、銃聲がきこえたと彼は思つた。それからいくらも經つてゐなかつた。ふと、何か物の動く氣勢が崖の上でしたので、仰向いてかれが見

上げると、一疋の鹿が、再び起つた恐ろしい虐殺から免れやうとするかのやうに、慌てゝ、崖と密林との間を下りて、そのまゝ入江の岸の草藪の中にその身を投じた。

或はその鹿はさつきの一發に重く傷いてゐるのかも知れなかつた。ぢつとかれが見てゐると、その草藪の中に半ばその身を埋めたまゝ、動きもせずにゐるのであつた。そしてその驚いたやうな、慌てたやうな大きな眼は、ぢつと此方を見詰めてゐた……。かれは始めは、此方から飛び蒐つて行きたいやうな、または折角の獲物を取り逃しては殘念だといふやうな衝動に驅られたが――その時手元に銃があつたなら、無論、それに向つて一發を放つたに相違なかつたが、暫らくその大きな眼を、悲しさうな眼を見てゐると、何とも言はれず可哀相になつて來て、かうした惡事の手傳をしてゐる自分が此上なくあさましい人間のやうに思はれ出して來た。『かうした惡事を我々さへ思ひ立たなかつたならば、この島の鹿はこんな目に遭はなくつても好かつたのだ……。何百代前の祖先から今日に至るまで、全く危害といふものを知らずに、また他の世界に見るやうな競爭といふことを知らずに、極樂の別天地に生きて來た鹿として、のんきに、平和に暮らして行くことが出來たのだ……。それを、慾のために、自分達だけ好い儲口を得たいがために、かうした惡事を實行するといふことは、何と恐ろしいことだらう、何といふわるいことだらう……。』かう思ふと、一緒に事をしてゐる三人の仲間達の心も、そのまゝ呪はずにはゐられないやうな氣持がした。この前にも起つたと同じやうな、淺ましい、悲しいやうな氣分に次第にかれは浸

されて行つた。

鹿は依然として、そこに坐つてゐた。かれがそこにゐるのを、また、かれがぢつとそれを見てゐるのをちやんと知つて居りながら、しかも何うしようともしなかつた。その恐ろしい虐殺の共謀者でかれがあるといふことは少しも知らぬかのやうに――。

四

この前の時ほどそれほど盛んではなかつたけれども、それでも始まつてから一時間位は、その銃聲が絶えず斷續してきこえて來てゐた。

それから押して見て、矢張、かなりの獲物はあるらしく思はれた。

かれの舟の漂つてゐる入江は、初めてやつて來てから、三度まであたりの感じが變つて行つた。初めは、樹の影で蔽はれて暗かつたが、夕日が低くなつて行くにつれて、その餘照がこの奥まつた中までもさし込んで來て、一時にぱつと明るくなつて行つた。それは鹿が慌てゝ遁げ込んで來た頃のことであつた。細かい波の寄つてゐる上に斜にさし添つて來た夕日の影には、何處か靜かな、落附いた感じさへ加つてゐた。それに、その明るい時間はかなり長い間續いた。波の上に微かに映つた夕日の影は、容易にそこから消えなかつた。沖には、歸つて來る石油エンジンの鮪舟の音がした。

その時には、ポンポンといふ音はかなり高くはつきりときこえてゐた。無論、沖を行くその舟は、餘りさうした音には重きを置かなかつたに相違なかつたけれど、それよりも自分の歸つて來ることにのみ心を奪はれてゐたに相違なかつたけれど、しかも、かれには、その石油エンジンのカタカタいふ音響が堪らなく氣になつた。もしや、あの舟の中の人が、その不思議なポンポンいふ音に耳を留めて、『あれは何だらう。あそこは、鐵砲は禁制な筈だのに……』かう思つて一緒に乘つてゐるものにそれを話しはしないか。それから、いろいろなことが想像されて、『太い奴だ……。お山の鹿を打つてゐやがるに相違ない……』かう言つて、そのまゝ舟の舳先を此方に向けてやつて來はしないか。さうすれば、最早おしまひだ。自分は賴まれたから漕いで來たのだ、自分は手を下して鹿を殺したのではない……かう言つて辯解して見たところで、それは何の役にも立たない。さうした惡事の共謀者として、自分も必ず牢に入れられる。いや、そればかりではない、お山の鹿を打つとは、ひどい事をしたものだと言はれて、牢から歸つて來ても、村には落附いてゐることが出來ずに、自分も、自分の妻子も路頭に迷はなければならなくなる……。かう思ふと、あゝして無殘に、殘酷に殺された鹿の思ひだけでも、その位の罰はやつて來るのが當然であるやうに思はれ出した。『あゝもう、決してやらない。今度、歸つたら、もう二度とかうした事はしない。きつとあらためる……誓つてあらためる。』かう思つてゐる中にも鮪舟のエンヂンの響は、そのまゝ海上を横ぎつて、急いで岸の方へと遠ざかつて行つた。かれはホツト呼吸がつけたやうな氣がした。

その時には、最早明るい夕日の光線は、全くその狹い奥深い入江から消え去つてゐた。あと三四十分もしたら、海にも山にも名殘なく薄暮が襲つて來て、あたりは全く暗くなつて行つて了ふであらう。美しい星が樹間からそれと仰がれるやうになるであらう。ふと思ひ出されて來たのは、都合に由つては、今夜この島の裏海岸で假泊するかも知れないといふことであつた。『困つたな……。假泊するとすれば、此處はあまり好い位置ではない。もう少し奥の入江、あの千人岩のあるあたりまで入つて行く方が安全なんだがな。……』かう思つて見たが、しかも夜になつてからでは、到底そこまで入つて行くことは出來さうには思はれなかつた。『まア爲方がない。あとで相談するんだ。』かうひとりで考へて、今度は七輪の火の消えかゝつたのを煽ぎ出した。

山の上では、銃の音がまだきこえてはゐたけれども、しかも以前のやうな盛んな音の連續はもうしなかつた。かれ等はあら方目的を達して今はその獲物を運び下すことについて相談をしてゐるか、でなければ、仕事が漸くすんだと言ふので、ほつと呼吸をついて、烟草でも吸つてゐるところであるらしかつた。次第に、薄暮はあたりを包んだ。樹間から透いて見えてゐた海の波の掀翻も、いつかすつかり見えなくなつて了つた。

七輪に起きてゐる炭の火が、目立つて赤くあたりに見え出して來た。

かれの眼の前には、此時何うした聯想か、自分の家にゐる妻子のことが浮んで來た。此間、錢を持つて行くと、ひどくびつくりしたといふよりも、ある恐ろしい想像に捉へられたといふやうにして、『お前さん、何うしたんだねえ？　わりいことをして來たんべ……わりいことをして取つて來た金だんべ……。おらア、いくら貧乏してゐたッて、そんなさもしい根性にはならねえのに、えらいことをして呉れた。』かう言つて、女房は何うしてもかれの言ふことを信用しなかつた。正しい持ぎで、そんな澤山な金がお前さんに取れるわけがないと女房は言つた。それを、何の彼のと言ひなだめて、漸く、此方を信用させるまでにするのは容易なことではなかつたことをかれは思ひ出した。『本當だ……嘘の言ふ通りだ……。正しい持ぎで、そんな大金が俺に取れる筈がないのだ。……ばれれや、おれだッて、牢に引張つて行かれなけれやならねえんだ。』またしても、考へがそつちの方に戻つて行つた。

また、崖のところで、ガサガサと草を分けるやうな音がした。はつと思つて、かれは其方の方を見上げた。しかし、何も見えなかつた。三人の中の誰かゞ戻つて來たのかと思つたが、さうでもなかつた。鹿かと思つて見たが、それでもないらしかつた。また、ガサガサと音がした。

急に、恐怖の念が強くかれを捉へた。かれ等は誰かに發見されたのではないか。海軍の望樓のランチか何かに發見せられてそのまゝ引かれて行つたのではないか。でなければ、もう、今頃は、誰かゞ歸つて來さうなものである。運んで來なければならないにしても、その前に、何とか報告があつて然るべき

である。……かう思ひながら、かれはまたぢつと耳を欹てゝ見た。今度は波の音の外に際立つて、耳に入つて來る何等の音響もなかつた。『やはり鹿だつたのかな……。』こんなことを思ひながら、かれは再び崖の上を仰いだ。夜の暗い空氣の中に、樹のこんもりしてゐるのが際立つて物凄く見えてゐるばかりであつた。潮がさして來たと見えて、舟の動搖がやゝ強く、七輪の火や、湯氣を白くたぎらせてゐる鐵瓶や、小さなランプの灯が頻りに夕闇の空氣の中に行つたり來たりするのが見えた。向うの岩には、波が絶えずドウドウと打寄せた。

五

氣が附くと、崖のすぐ傍のところに、誰か立つてゐるものがあつた。

『何だ？　鐵公か？　びつくらした。二つとない膽をなくして了つた……。何うして、默つて立つてゐるのだ。』

『あはははは。』

と、鐵公は戯談らしく笑つた。

『戯談ぢやねえぞ、本當に——』

『びつくらしたな……とつさん……。うまく俺が手にはまつたな。』

『馬鹿臭い。』

『とつさん、臆病だから、威かしてやれつて、親方が言つただ……。』

『うそこけ。』

『ほんまだ、ほんまだ――。』

『それで何うした？』

『何が――？』鐵公はわざとしらばくれたやうにして言つた。

『何がもねえもんだ。獲物さ、取つたものさ？』

『あゝ、それか。』始めて氣が附いたやうにして、『大しめ、大しめ！』

『この前と何うだ？』

『さアな、此間とは、とても比べものにはならねえがな……。それでも隨分打つた――。』

『二十頭も打つたか？』

『それではきくめい……。でもな、矢張、始めとは違つて、段々遁げるのが旨くならア。あいつらだツて、命は惜しいでな……。』

『それはさうともな……。』

『だから、この前のやうに、樂には行かねえ……。此前は、つい、鼻先まで近寄つて行つても、彼奴

等知らん顏をしてゐたもんだけれど、今度はさうは行かねえ。影さへ見れや、ぐんぐん遁げて行つて了ふだ。だから、鐵砲打つた割に獲れてゐねえや。』

『隨分、鐵砲打つたな……。よくきこえるぜ……。鮪舟にきこえやしねえかと思つて、おらア、心配したぜ！』

『きこえたつて、大丈夫だ。』

『でもな……。』

『いざとなれば、船で遁げ出せば好いんだ……。そんなことを氣にしちや、こんな仕事は出來ねえや。とつさん、好い男だけども、臆病でいけねえや。』

『だつてな、おめえ……。』

『まア、好いや、そんなこと……。それよりか、此處に、崖の傍に路はねえかな。』

『さア。』

『ありさうなもんだがな。』

『何うするんだ。』

『一つ一つ運ぶのは、大變だで、上から落さうつて言ふんだがな。』

かう言つて鐵公は、その崖の傍から林の中へ入つて行つた。暫く立つと、オウイオウイといふ聲が向

うからきこえて來た。他の二人のものも、路を求めて、此處へと下りて來たのであつた。

崖の上までのぼつて行つた鐵公は、何か頻りに親方と話してゐたが、やがて再び下におりて來て、

『とつさん、松火を二本べい、つけてくれや。』

『よし、よし。』

かう言つて、豫ねて準備して置いた松火を船の底から出したが、それに、石油を灌いで、マツチを摩つて火を點した。松火は明るく燃えた。

『ぢや、好いか、上から落すからな。海の中に落ちねえやうに、よく見てて呉れろな、とつさん。』

『よし、よし。』

鐵公の持つた松火は、樹の下の草藪の中を上へ上へとのぼつて行つた。下から見てゐると、その崖の上から右に少し偏つたところに、他の二人もゐるらしく――そこまで、既にその獲物は運んで來てあるらしく、頻りに何か話し合つてゐるのがきこえた。松火もそこにまで行つて留つた。

暫くした時には、その松火の一つを振り翳して、三十二三になる方の男の鬚面が、崖の上から下を見てゐるのが、はつきりと船の中から見えた。鐵公はまた下りて來た。

『それにしても、今夜皮を剝ぐんかな。』

『何うだか知らねえ。』

『剝ぐんぢやたまらねえな。』

『何故？』

『何故でも……見てゐられねえや、慘めで……。』

『そんな氣の弱いことで出來るかよ、この仕事が――。』

かう鐵公が言つた時、崖の上から、鹿の獲物が一頭、二頭、三頭――後には何頭ともわからないほど數多く音を立てて凄じく落ちて來た。

一つの恐怖

Kはぐらぐらと眼が眩むやうな氣がした。何が何だかわからなくなつた。かうして山の中の溫泉場の二階の一室に身を横へてゐる、それだけはわかるけれども、またさつき女中が來て、湯を取換へて行つたのもおぼろげながら記憶に殘つてゐるけれども、それ以外には、なにも彼もぼんやりして了つた。Kは餘りに疲れた。

Kは何時間、さうやつて、兩手を後頭部に組み合せて、空虛な眼を天井に仰向けて眠るともなく覺めるともなくぢつと身を横へてゐたかを知らなかつた。

しかし、ある期間經つた後、かれはすつくと身を起した。『かうしちやゐられない……かうしちやゐられない！』かう言つて自から頭を振つた。『まご〳〵すれや、俺は駄目になつて了ふ。亡びて了ふ。……折角これまで堪へ忍んで來た艱難も何も彼も無駄になつて了ふ。……』かうて續いて彼は思つた。また、頭がぐら〳〵した。家の柱や、長押や、鴨居がぐる〳〵廻るやうな氣がした。

譬へて、れば、底の底の底に、落ちてゐるやうなものだ……。もうとても人生の烈しい渦卷の中に生息してゐることが出來ずに、避くべからずに底の底に沈んで來たやうなものだ。自分のゐるところは、山の上の上の、旅客などは滅多にやつて來ないやうな高い溫泉場の一室ではあるけれども、しかも、そこが人生の底の底――もう何うすることもできない底の底なのだ……。

『母さんが死んだのさへ、俺には堪らない打擊であつたのに、それだのに、何故お前まで死んだのだ。……。辛い世の中に唯一の慰藉であるお前まで死んで行つたのだ。兄を一人この廣い世の中に殘して死んで行つて、それでお前は好いと思ふのか。』

この溫泉場に來た當座は、いつもかう心の中に獨語して、母のことを思つたり、妹の夭死を嘆いたりしたものだが、今はそれさへ、さう思ふことさへ、堪らなく重荷になつて行つた。

Kに取つては、何と言つて好いかわからないほど辛い人生であつた。かれは幼くして父に別れた。そして幼い妹と共に、賃裁縫などして暮してゐる母の細い痩腕のもとに生長した。あまつさへ、かれは豪くならうとする志を捨てなかつた。母もまたかれに豪くなることを激勵した。かれが中學にも滿足に行けない身で、高等學校に入學し、また誰も學資の世話を見て呉れるものがない身で、その學校の寮舍に在學したことだけでも、それだけでも、いかにかれが人生に、實生活に、また學業に刻苦精勵したかといふことがわかつた。かれは新聞配達もした。牛乳配達もした。學校の寮舍に入つてからも、人の嘲け

るのをも思はず、いろいろ内職めいたことをした。否、その學資が十分でないために、その學資をつくる時間に學課の時間を取られて了ふために、他人が一年で成功するところをかれは二年も三年もかゝつて漸くやつて來たのであつた。何んなにかれは苦しんだであらう。また何んなにかれは人生の不平均を怒つたであらう。時には、全く絶望して、何うしてももう再び起つたことは出來ないと思はれたやうなことも一度や二度ではなかつたのである。『學校なんか、何うでも好い。學士の稱號なんか何うでも好い。もつと手近なところで滿足して了はう。』かう思つたことも度々であつたのである。しかも、その時には、いつも母が、妹がそのつつかえ棒となつた。意氣地なく倒れやうとするかれのつつかえ棒となつた。そして何遍となくかれはそこから起き上つた。であるのに……であるのに、もう大學に入るばかりといふ今になつて、あらゆるつつかえ棒からかれは離れなければならなくなつた。かれは何のために勉强したらう。また何のためにかれは刻苦したらう。母がゐればこそ、妹があればこそ……。母の喜ぶ顏を見たいと思つたればこそ、妹の娘になつて行くのを十分に保護したいと思つたればこそ……。それだのに、それだのに、この二月には流行感冒で母親が死に、この八月にはチブスでその妹が、一緒に母親の死を泣いた妹が、そのまゝ死んで行つて了つたではないか。否、そればかりではなかつた。貧しいかれは、その跡始末や何かについても、常に世話になる親類達から夥しい侮蔑を受けなければならなかつた。かれはすつかり悲觀して了つた。何のために勉强するのか、何のために刻苦するのか、自分にもは

つきりわからないやうになつて了つた。かれは前の方にのめるやうにして、または傷いた獸がそのかくれ場所を求めるやうにして、この山の中のさびしい溫泉場にやつて來たことを思ひ出した。

『何故、お前は死んだんだ……。せめて、お前だけでも生きてゐて呉れれば、さうすれば、俺にも生命があつたんだ……俺の今までの苦勞も努力も、水の泡にならなくつても好かつたんだ、何故、お前は死んだ？』

溪流の咽ぶやうに流れてゐる岸を歩きながら、Kはひとり言のやうにそれを口に出して言つた。

『俺が、俺が、この辛い、苦しい世の中に生きてゐたつて、何になるのだ！　俺が、大學を卒業して、世の中にいくら用ひられるやうになつたつて、それが何になるのだ！　お前がゐずに……また母さんがゐずに――』かう思ふと、ひとり手に顏の皺がよつて、嗚咽が胸にこみ上げて來た。

Kはその山の上の溫泉場に來てから、既に一週間を經てゐることを思ひ出した。少し休んで來よう。あまりに疲れた。かう思つてかれはやつて來たのであつたけれども、しかもその疲勞は容易に醫され得たとも思はれなかつた。またその悲哀の重荷も、いくらも脫却し得たとも思はれなかつた。かれはいつものかれと違つて、人とも口をきかず、湯にも碌々入らず、蒼い顏をして、寢たり起きたり、またさびしさうに散歩したりしてゐるかれを他人か何かのやうに其處此處に發見した。

恐らく、さういふ風に客觀的に、自分で自分を觀察するといふことは、つひぞこれまでにはなかつたことに相違なかつた。Kはつくぐ〜その自分が、そのあはれな姿が、さびしさうに、或は溪流の畔、或は白樺の林の中、或は溫泉場から山へとのぼつて行く路の附近に彷徨つてゐるその身が、可哀相に憫れに思はれ出した。時には、それが自分でなしにさうした不仕合せな人の姿か何かのやうに思はれたりなどした。

本當に不仕合せな男だ……。あらゆるものから見放され、あらゆるつつかえ棒から取離され、何處に行つても、親身にこの身を思つて呉れるものゝないその男！　全くひとり限りになつて了つた男！

自分より一年上であるSといふ男と、Aといふ男とが、本を讀みに——靜かに本を讀みに、矢張、この山の溫泉場に來てゐたが、來た當座、Kはすぐ懇意になつて、二三度話をしたことがあつたが、その專心に勉强してゐるさまも、かれに勉强は刺戟せずに、却つて空虛といふことを思はせた。『いくら努力したつて、仕方がない……。』かうかれは思はずにはゐられなかつた。

SはKに言つた。

『でも、さう言つてもいかんよ。努力と勞働とは、人間とは、切つても切ることの出來ないもんだからな……。』

『それは、さうだ。さうに違ひない。僕だつて、つい此間までさう思つてゐた。しかし、今は僕にはもうさう思はれなくなつて了つた。情けないと思ふね。』

『何うしてだね？』

『何も彼も空虛になつちやつた。何れが本當だか、何れが虛僞だか、それさへわからなくなつて了つた。何故、僕等がかうして生きてゐなければならないのか、それすらわからなくなつちやつたんだから——。』

『それは困るね。何うかしたんだね。餘り勉强しすぎたんだらう？』

かうSはKの顏を見るやうにして言つた。

『でも、その中には、何うかなるだらう。何うか解決がついて行くだらう。何うも仕方がない……、かういふ風になつて了つたんだから——。』

『疲れたんだね。さういふ時には、じつと落附いてゐるに限るね……。なアにぢき治るさ。』

此頃でも、Kは、SやA達が、本を持つて行つて、眺望の好い山の上だの、靜かな林の中だの、谷川の畔の石の上などで一生懸命に讀んでゐるのを見た。しかし、Kは何も言はなかつた。言葉をすらかけなかつた。向うで此方を見た時には、爲方なしに會釋はするが、さうでなければ、そのまゝ默つてその傍を掠めるやうにして通つて行つた。

近在のもの、または山の向うのもの以外には、滅多にこの山の上の溫泉にやつて來るものもないので
あつたが、何うした風の吹きまはしか、女は人の細君、男はそれよりも五つも六つも年下といふやうな
二人づれが、ひよつくりこの溫泉にあらはれたので、いつとなしに、それが滯在してゐる人達の噂の種
となつた。

SやAは頻りにそれを面白がつて話した。

『何うも、僕はあの男見たやうな氣がする……。』

かうAが言ふと、Sも、

『さう言へば、僕等の三年ばかり前にゐやしなかつたかな。』

『何うも、僕もさう思ふんだが……。たしかにゐたと思ふがな。勿論、卒業はしないがな。』

『たしかにゐたよ。』

かう言つてAは笑つて、『無論、女房ぢやないね。誰か人の噂に相違ないね。』

『さうらしいね。』

『たしかにさうだよ。何うも、口のきゝ方が自分の噂ぢやない。……それに、何うだ、あのふざけ方
は？　女房ならあんな眞似はしやしない。』

『矢張りさうかな……。里に近い溫泉では露見の虞があるので、それで、こんな山の上までやつて來

たのかな？』

『さうだね。たしかにさうだね。……何でも、あの隣の室では、隨分えらいところを見せつけられる
ツていふ話だぜ――。』

『それから、此間は、夜中に二人して、湯の中でふざけちらしてゐたつて言ふぢやないか。』

『厄介な奴等だな。』

かうは言ひながらも、AやSを始め、滯在してゐる浴客達に取つては、さうした噂の種がないよりはあ
る方が好いらしかつた。皆なは笑ひながら、その二人についての話を持寄つた。

しかし、その二人づれはそんなことには頓着してはゐなかつた。ことに女の方は、さうして若い男を
自由にしてゐるのを見得か何かのやうにして、平氣で歩いた。谷川の岸でも、林の中でも、山の上でも、
何處でも二人は手を組んで歩いて行つた。

『馬鹿だな、彼奴は？　よく恥しくないな……。』

かうまたAは言つた。

と、Sは、『でも、さうばかりも言へないぜ！　あゝいふ年を取つた奴は、離れられないつて言ふぜ！
彼奴、あゝやつて、くつついてゐるのは、見得ばかりぢやないよ。』

『さうかな……よく君は知つてゐるね。』こんなことを言つてAは笑つた。

Kにはしかし、さうしたものは何でもなかつた。さうしたものを目にしても、Kは何とも思はなかつた。寧ろKにはさうしたことを面白がつて、つまらなく騒いでゐるAやKやその他の人達の氣が知れないやうな氣がした。

それでゐながら、いつともなしに、Kの心や體が、そつちの方に引寄せられて行つてゐるのをK自身すらも知らなかつた。Kは唯重苦しさを感じた。世間から來る重荷の上に、更にある不可解の重荷を積み上げられたやうな氣がした。頭が夥しく眩惑した。

かれのまだ本當に知らない性慾の領土――それが厭な、厭な、何とも言はれない光景を彼の頭にひろげて見せた。と、黄い粉が、夕日の光線の前にわびしく舞つてゐるやうな塵埃が、かれの眼の前を通つて行つた。矢張、山や川や林がかれの頭を壓迫すると同じやうに、それがかれに重苦しい辛い感じを與へた。

Kは頭を押へて暫しそこに立つてゐた。

『とても、駄目だ、とても駄目だ！』

かうKは自から呻くやうに言つた。堪へられないさびしさが次第に彼を襲つて來た。

しかしそれは二三日前からであつた。谷川の岸を歩いてゐたかれは、俄かにその大きな石や、烈しい瀬や、折れ曲つた潭が自分の體を目蒐けて流れ落ちて來るやうな氣がした。否そればかりではなかつた。

あらゆるものが、山が、林が、崖が、路が、そのいろいろなものが、すべて自分を犇々と十重二十重に取卷いて、如何に出ようとあせつてももう再びとそこから出ることが出來ないやうに、頻りにその計畫を進めてゐるやうな氣がした。一種の恐怖が何處からともなくやつて來て、烈しくかれの心を脅かした。

かれは谷川の岸にある大きな石に腰を寄せて、額を兩手で押へて、長い間じつとしてゐた。

そこにSがやつて來た。

『何うかしましたか？』

『いや――』かうKは言つたが、後頭部を片手で押へて、『何うも、頭がわるくつていかん。』

『めまひでもするんですか。』

『何だか、かう地面が凹んで了ふやうな氣がしていけない。何か何だか、丸でわからなくなつちやつたやうな氣がするんだからね。』

『それはいかんね。醫師に見て貰つた方が好くないかな……。』

『なアに、それほどのことはない。少し落附けば好いんだ……。』

かう言つてKは靜かに明るい日影の中を旅舍の方へと歩いて來た。

旅舍に歸つてから、かれはぐつすり熟睡した。そして再び眼がさめた時には、いくらか氣分が清々してゐるのを發見して、安心した。かれは長押にかゝつてゐる手拭をつかんで、そのまゝ廊下を浴槽の方

へ下りて行つたが、ふと、氣がつくと、矢張、その湯氣の籠つた燈火の中に、いつも見る黄い粉が、また夕日に榮えた塵埃のやうなものが簇々と渦を卷いて舞つてゐるのを目にした。頭がまたぐら〳〵とした。かれは湯に入らずに、そのまゝ室の方へともどつて來た。

『これはいかん。』

かうまたかれは叫んだ。

これはとても此處にかうしてじつとしてはゐられなくなつたのではないか。最早浮ぶ瀬もないやうな深い暗い淵に沈みつゝあるのではないか。こゝが、この山の中が、かれの最後の土地となるのではないか。かう思ふと、かれはズウンと深く底の底にその身が押し落されて行くやうな氣がした。冷めたい汗が氣味わるく絞るやうに體中から出て來た。

その夜も、かれはぐつすりと丸で死にでもしたかのやうに熟睡した。

やがて何も彼も生物のやうにかれには見え出して來た。柱も、庇も、鴨居も、欄干も、山も……。殊に、吃驚させられたのは、翌朝、その二階の欄干から正面に見えてゐた大きなA岳の姿が、丸で大入道のやうに恐ろしく動き出したことであつた。否、それればかりではなかつた。周圍をめぐつてゐるあらゆる山岳が、寄つてたかつて、かれを壓迫するやうに、かれを刻々に襲つて來るやうに見えた。『一刻も早く、一刻も早くこの山の中から遁れ出さなければ駄目だ……。』かう何處かで誰かゞかれを促した。

『一刻も早く、早く……。』

かうまた何處かで言ふ聲がした。

『もう歸るんですか？』

かうそこにやつて來たSとAとは言つた。

Kは默つてゐた。Kの眼はギラギラとSとAとの上に光つた。

『餘り急ぎやありませんか。』

『でも、もう歸ります。何うもいろいろなものが私を脅かしてしやうがない。此處にゐると、山でも、川でも、樹でも、皆な動き出して來るやうな氣がするんですから——。』

『頭が疲れてゐるんですな。』

『さうです、さうです——。もう二三日も此處にゐると、私は何うなつて了ふかわからないやうな氣がしますから、何としても、もう歸ります。』

『東京に歸つても、何うかと思ひますけれど、さう思つたら、お歸りになる方が好いかも知れませんね。』

『氣持もわるいんですか？』

かうAが傍から訊いた。

『いや、氣持のわるいことは、ちつともないんです。唯、いろんなものが私を脅かすやうな氣がするんです。それもそんなことはないといふことは、ちやんと、理性でわかつてゐるんですけども、何うもしやうがないんです。何しろあのA岳が動き出して來るやうな氣がして爲方がないんですもの。』

『ふむ。』

かう言つて、Sは心配さうにKの顔を見た。

『こゝの醫者に見て貰つたら、何うです?』

『いや、それよりも、一刻も早く此處を出て了ふ方が好いと思ふ……。その方が好い……』

かう言つてKは行李にいろいろなものを詰めた。つゞいて、Kは旅舍の女中を呼んで、宿錢の勘定をして貰つた。

女中もそれと知つて、驚いて、

『お歸りになるの?』

『あ、もう、歸る……。』

『何うして、そんなに急に……。電報でも來たんですか。』

Kはしかしその理由は話さなかつた。唯一刻も早くその勘定をして來て呉れることを命じた。彼の周

圍を取卷いたSもAも女中も、矢張、山や川や樹と同じやうに、絶えずかれを脅迫してゐるやうに彼には思へた。

Kの顔は、誰の眼にも、わるく蒼白く昂奮して見えた。眼もイヤにギヨロ〳〵と氣味わるく光つた。

『大丈夫かね、君。』

此方に來てからAは心配さうにSに言つた。

『さアね。何うかしてるね。……しかし、僕の見たところでは、さう大したこともないと思ふけれど、つまり疲れてゐるんだね。落附いてやすむと好いんだけども——』

『山や空が動き出してでも來るやうな氣がしてるらしいね。大丈夫かしら?』

『そこまで、あの山の上まで送つて行けば大丈夫だらう。』

で、AとSとは、荷物を持つてやつたりして、その山脈の脊になつてゐるあたりまで送つて行つた。

Kは頭を垂れて默々として歩いた。こつちから言葉をかけても、單に受答へをするだけで、すぐ深い沈默の中に入つて了つた。否、そればかりではなかつた。をり〳〵低頭き勝ちの顔を上げて、こつそりとあたりを見廻すやうにしたが、その時にはKの顔は全くあるものに恐ろしく壓迫されたやうにオドオドと筋肉を顫はせてゐるのが見えた。K自からにしても、一刻も早く、この山から遁れなければならないと思つてゐた。

Kの内部の光景が、さういふ風に、不整、不安、不調をきはめてゐるに拘らず、また、いざと言へば、何うなつて了ふかわからないやうな恐怖に滿されてゐるに拘らず、あたりは、明るく、靜かに、落附いて、そしてしんとしてゐた。ともすると、秋の初めに不意に起つて來る凄じい風もなければ、妖怪か何かのやうに恐ろしく黑く卷き上つて來る雲もなかつた。A岳の上に一片靡いてゐる白い雲も、動きさうで動かずにじつとしてゐるのをかれ等は目にした。次第に、かれ等は山脈の脊のやうになつてゐる所へと近づいて來た。

そこには、夏中は、溫泉場から茶店が出てゐて、わざわざ高い山を越してやつて來る浴客達を迎へるやうになつてゐたのが、つい、この近くに下りて行つて了つてからは、組み立てた柱が、板が、風雨に曝されて、すつかり捨てられたさびしさをあたりに見せてゐた。かれ等はそこに行つて休んだ。

遠く前に展げられたT川の狹谷をSは指すやうにして、

『あれがT山だね。それから、此方に大きく見えるのがY岳だ。そら、そこがU町だ……。』

しばし、かうやつて眺めてゐたが、今度はKに向つて、

『何うだね？　ちつとは好いかね。かうひろびろした眺望を見たら、少しは氣も晴々するだらう？』

『……』

Kは何か言はうとしたが、しかも言はずに、唯ちよつと頭を振つた。Kは一刻も早く、このAやS達からも遁れなければならないと思つた。

Kはすぐその支度をした。

『もう行くのかえ？』

『何うも難有う……もう行く。ぢや、さやうなら。』急いでKはAやSの持つて來てくれた荷物を取り上げた。

『大丈夫かな――』

『大丈夫だ、大丈夫だ。』

かう言つたまゝKは遁れるやうに坂を下つた。Kは一散に走つた。振り返りもせずに走つた。漸く恐ろしい脅迫から遁れて來たやうに――。しかし、暫く來た時には、恐ろしい疲勞と恐ろしい悲哀とがかれの眼を眩ますやうにした。かれは林の中に入つて、その避難所を求めた。

――花袋全集　第九卷　終――

解　說

松波治郎

「ある僧の奇蹟」が發表されたのは大正六年九月であつた。

星菫派的ロマンティストでセンチメンタルな青年田山花袋は、既にして自然主義の精神に自己を見出し、其の瀧刺果敢な戰鬪は、凡ゆる非難を克服しつゝ、生一本に、眞つ正直に、邁進して、自然主義文學の高い城壁を占據したのであつた。

壯年田山花袋は正に此の意味に於て日本文壇の最高指導者であつた。と同時に、自然主義文學の大御所として、自他共に許さるゝ聲望一世を壓したものであつた。

が、此處で、このまゝに安住することは、在來の主張に膠着して、我執の中に自己を見出すことは、眞摯なる文學の殉教者たる田山花袋に許さるゝことではなかつた。日に月に、刻一刻と思念して已まない花袋は、更に自己が內部的に一大進展をしなければ、堪へられない偷安の苦痛があつた。

人生不惑の域を超して正に六年、倦まず弛まず瞶めて來た人間生活の奥から、花袋は胸奥に確たる力

を把握して居た。

その歳一月に「一兵卒の銃殺」を發表した花袋は、新凉九月、四十六歳を期して、新らしく自然主義の殼を破つて出て來たのである。それが卽ち「ある僧の奇蹟」であつた。作者は、作者自身に此の作が「一轉機」を劃するものであり、人間の心の不壞を摘發して示したものだと云つて居る。

此の作は、毀譽相半ばして居た。ある人は、餘りにドクマチックな作として、田山花袋の作中での高位を示すことに不愉快を感じた。然し、正宗白鳥氏等は、此の作を昭和の時代になつて、再び絶讃したものであつた。

「動かざること山の如し」、私は、當時、先生の此の態度と此の作品に、どれだけ傾倒したかも知れなかつた。

田山先生は、類稀れなる法華經の捧持者であつた。人間の醜さを、肉の心理を寸毫も假借する處なく、暴露し、摘發し、檢討し來つた先生が、其の道から、遂に救ひを見出したのが大乘佛敎であつた。然し、先生は此の大乘佛敎に對しても、人間の肉の生活と同じく、大乘佛敎なるが故に——との態度を棄てゝ、ぐつと、身近に引寄せて、極めて仔細に、嚴格なる科學者の態度と、珍藏の愛器を玩ぶやうな親しさ、馴れとを以て接したのである。

金剛不壞の內心、これを說くに弘法も傳敎も、日蓮も凡ゆる難解の文字、幾段の體系を、もの〳〵しく組み立てたものであつた。それは、各々難行苦行の結果であつた。

「ある僧の奇蹟」その他此の種の田山花袋の作品は、それを、いと易く、極めて平坦に、ドグマと稱される程の平俗に、天晴れ小說として具現させたのである。まことに、一大飛躍であつた。これあつてこそ、田山花袋が、眞の大作家であり、眞の大文豪であつたことを實證するものであり、且つ人間としても、偉大さ、莊嚴さを感得することが出來るのである。

去り乍ら、飜つて、これも亦、先生の難行苦行の賜と云ふに私は憚らない。自己に鞭打ち鞭打ち來つて、此處に到達したのは云ふ迄もない。文學者としての田山花袋の態度に、敬虔の念なくして思ふこと難く、その一切の作品をして重からしめる原因も此處にあると思ふ。

もはや此の卷に收められた諸篇によつて、田山花袋は、一個の自然主義の文學者ではなく、文學そのもの、凡てを包含した文學そのものであると云ひ得るのである。全く、此の卷の諸篇「ある僧の奇蹟」と流れを同じくする一連の作品こそ、田山花袋作品の正に畫龍點睛であつたのである。

此處で云つて置きたいのは、かうした作品を生んだ作者の實人生である。「Sとその妻」は、人間の死と云ふものが一つの救ひになつて居る。雷が、どうにも解けない夫婦の心を、爽快にも片づけて居る。殘された隱れた女性にすら、それを羨望させて居る。情死を計つて、自分だけ重傷の上、生き殘つた男が、『死』と云ふものを瞶め乍ら、其處に暗さも、あがきもなくて、坦々として居る「號泣」も、死から

解放されて、再び世の中へと出て行つた「彼の一日」も、更に、死を遂げた情婦の夢を遊女屋に見る「彼女の幻影」も、いつもいつも、死の影をこびりつかせ乍らに、讀者に些かも死の恐怖だとか、死の暗鬱だとかを感じさせずに、死を掌上に玩んで居るかのやうに、反つて、死そのものの平靜を思はせるかのやうに、いや、一歩を進めて云へば、死は一つの現象でしかないとの大乘佛敎の光りを、ほのかに悟らせるかの如くに、非常に穩かに認識させ浸み込ませてあるのだ。「山上の震死」は、死に對する不壞の心が、如何に强く逞しく、人間を平靜にあらしめ、神祕が其處に生れるかを喜びを以て表現したものである。

さて、これ等は「一つの空想」のやうに淋しい湖畔の一人物が、心の奥に望んだものを表現したものであつたらうか、いや〳〵、それは、望んだ世界ではなく、田山花袋自身が、腹の底から、さうなつて居たものであつたのだ。

作者の實人生に、これが實證されたのである。田山花袋の最後が近づくと、花袋は『死の諦觀』に入つたと新聞紙は報じた。これは實際であつた。

既に、死を知つた先生は醫師の注射も投藥も斥けて、ひたすら、死そのものの實際を知らうとした。自らの死を客觀的に把握したい、自分の死を、自分で、はつきりと見極めやうとの意志であつた。從つて、その臨終は、全く、傑僧の入寂と些かも異る處がなかつた。いや、大宗敎家と異つて、その立場が

周圍から、何等の强制も希望もない自由さの爲に、より以上の莊嚴さ、死と親しんで行く尊い姿が如實に顯はれて居た。

腹からの文學であつた！　强靱な文學であつた！

死に對してすら、これであつた。だから、お家の藝とも云ふべき、男女の情感、肉體の問題に至つては、此の卷に收められたものは、それは檢討し盡された結果のくろがねであつた。

「2と3」は、戀人のある女が、その戀人と手をきらずして、結婚し、これを又、その新しき夫が許容して居る、そして、其の夫婦に子供迄出來ても、尙かつ女は、以前の情人と、その夫婦の家庭內で逢曳すると云ふ、世にも奇怪な物語である。しかも、作者は、そのうちの女も、夫も、情人も、誰れも責めては居ないのだ。そして、これ程の運命的な、苦痛な生活を、淡々として、悲劇や慘劇に終らせずに描いて居る。此處に作者は男女間の問題は、要するに鍛錬であることを敎へて居る。其處に救ひのあることを示して居る。

又、田山先生がタイムの經過を重視した作品に「鸚鵡」がある。幽靈船の原因ともならうやうな、そんな船底に押込められて、海外へ賣られて行つて、一生を賣淫の生活に送り、最後は無緣佛として、異國の土になる女性の生活にも、尙タイムの救ひがあることを表現したものだ。

「遺傳の眼病」は立派な宗敎小說である。此處では憎むべき眼病が、反つて大慈悲の顯現となつて居る。

この作は、一面に立志小說のやうな型を持ち乍ら、法華經をよく讀んだものには、素晴しい感銘を與へる所の、觀世音の眞意が具現されて居るのだ。一切が恩惠である。一切が大慈悲である、一切が心そのものである、それが作者の慣れた筆致によつて、平凡過ぎる程平凡に、むしろ低俗に迄碎いて、描き盡されてある。萬人共に簡單に咏嘆し得る名畫である。

田山先生が、如何に人生を愛して居たか、それは涙ぐましい迄に此の「遺傳の眼病」で讀み取ることが出來るのである。「Nの水死」は、此の意味に於て、解脫への暗示であるとも云へよう。

「萎れた草」は不治の病に惱む青年が描いてあるが、先づ第一に、此種のテーマに依る荒唐無稽さがない。私は、しば〳〵無知識極まる此の種の小說を讀んで痛憤したものだ。病氣そのものが解つて居なくて、何の感銘があらう。だが、流石に田山先生であつた。簡潔な筆致に、患者の心境も、病氣の實際も、生々しく眞實が描かれてある。文學者として執るべき研究態度、いや一切の人間が物に對して執るべき態度、眞摯でなければならない態度を此の作から敎へられるものは尠くないであらう。

「土藏のかげ」は、自然に內部から押し上げて來る人間性と、それを重大視しない主人とからの一家庭の出來事が書かれてある。幸福と云ふものが、劃一的な意志で計つたもの、膠着した支配者の希望の强制のみでは、何にもならないことが敎へてある。自然の力、內部の已むなき欲求、それに順應する、それを、導く、其處に人生の祕訣があるのだ、と、作者は作品の蔭から囁いてゐるのだ。

「錆びた沼」も「再生」も、人間と自然との、渾然と融和された作である。其處に此の作者の通有である、限りない咏嘆があるが、これは、咏嘆しつくしても、咏嘆しきれないもので、ある人の云ふが如くに咏嘆に過ぎる、と云ふのは當らない。作者は大きな立場から、自然をも、人間をも、平靜な、澄んだ心で、眺めて居るのである。示唆の深いものである。

「一夜」は微笑ましい作品である。一人の男に對する二人の女の感情も、その宿の女中も、その隣室の客も、墨繪の一刷毛の中に、巧みに、この脂濃さが取り去られて、一幅のカリケチユアになつて居る。作者の興奮がないからだ。溫かい、靜かな眼で、愛慾の世界を撫でゝ居る感じだ。センセイショナルな筆を弄すれば、これは立派なユーモア小說の題材である。しかも、それをユーモア小說に墮させなかつた手腕は、作者の老練と、文學と人生に對する眞劍さであらう。

「林に添つた道」は官能小說である。十九の少年が、初めて旅に出て、內心の靑春に、適應する外部の刺戟に、幻惑を感ずる惱みを抉り出してある。

かうした小さな短篇に、これだけ如實に、大膽に、克明に、肉への發展を暴露した作品は尠からう。沸り立つ欲求、それに鬪ふ羞恥、それが靜かな大自然を背景として、くつきりと浮彫にされて居る。全篇悉く、珠玉の文字と云つてよからう。これだけの太いタッチを用ひ乍ら、纖細な情感が漲り溢れて居る、醜かるべきものを描いて、これだけの美感に浸らせる。巨匠の腕である。

その他「强い心」も「絶壁」も「足」も、「Kの死因」も「ぬかり道」も、「島の虐殺」も「一つの恐怖」も、孰れも人間の心の奥を、右から左から、縱から横から、田山花袋が、瞳を凝らして、眺め込んだものである。しかも、其の瞳に、いつも皮肉の影や、冷たさや、意地惡さがなくて、溫かく、時には涙をさへ浮べて居る。

卷を閉ぢて、靜かに感銘を味へば、輕い吐息と共に、何かしら安心と、心强さとが胸に來る。

そして人生が、人間が、今更に懷しくなつて來る。これが田山先生の藝術の力である。味である。

それは大正十三年の秋の暮頃だつたと記憶するが田山先生が淺草寺で天下の碩德を前にして『僧侶は野に出よ』と云はれたことがあつた。その頃、先生は頻りに『自由な心』を說かれた。右へも左へも上へも下へも、躊躇なく、何時でも引き返せる心を說かれた。更に、『心も亦虛妄』と說かれた。言葉は心を、その儘に表現し得ぬとも說かれた。

此の卷に痛感する處は、それが悉く文學になつて居ることである。構へのない態度で、極めて坦々と平面的に敍し來り敍し去られた一切に、汲み盡せぬ含蓄と、行間に溢るゝ眞と美と、溫い人生愛とが、惻々と身に迫るのを覺えるのである。

（昭和十二年九月三十日の曉、日支事變の戰況ニュースを聞きつゝ）

昭和十二年十月十日　印刷
昭和十二年十月十五日　發行

花袋全集　第九卷
豫約價金壹圓八拾錢

著作者　田山錄彌
發行者　東京市小石川區竹早町三十二番地　川俣馨一
印刷者　東京市豐島區巢鴨五丁目一〇八二番地　矢島勇三郎

（矢島印刷所印刷）

發行所　東京市小石川區竹早町三十二番地
（內外書籍株式會社內）
花袋全集刊行會
電話小石川(85)一〇五四番
振替東京二八七九〇番

花袋全集刊行會
不許複製

693
176

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black